

『日本アジア研究』第13号（2016年3月）

故郷は屋久島，終の棲家は敬愛園 ——ハンセン病療養所「星塚敬愛園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

国立ハンセン病療養所「星塚敬愛園」に暮らす70歳代男性のライフストーリー。

岩川洋一郎さんは、1937年2月、鹿児島県屋久島の生まれ。1948年5月23日、11歳のとき、父親に連れられて、鹿児島県鹿屋市にある星塚敬愛園に入所。

第1回聞き取りは2007年12月26日、星塚敬愛園自治会会長室にて実施。聞き取り時点で70歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、下西名央。第2回聞き取りは2008年8月17日、同じく敬愛園自治会会長室にて。聞き手の顔ぶれも同じ。

現在、星塚敬愛園の入所者自治会の会長をつとめる岩川さんは“予防法があり、こういう施設＝ハンセン病療養所があったればこそ、いま自分たちが生き長らえられている”という基本認識の持ち主と思われる。11歳で星塚敬愛園に入所したとき、彼は「さびしさ」を感じなかったという。父親の、屋久島の役場から鹿児島県庁への転勤に伴い、鹿児島市内の小学校に転校してきた彼には、友達がいなかった。しかし、ここ、敬愛園の少年舎には、同年代の同病者がいっぱいいて、一緒に野球なども楽しめて、おかげで孤独を感じずに成長できた。さらに、岩川さんはいまでは“誤診”と疑っているが、数年遅れでやはりハンセン病と診断されて敬愛園に入所してきた父親は、特効薬プロミンの治療を受けて「軽快退所」し、故郷の屋久島で、周囲のみなが彼のことをハンセン病療養所退所者と知りながらも、町会議員を3期12年つとめた。岩川さんには、身近なところに、ハンセン病に罹ったからといって卑屈になるにはおよばないと考えられるだけの、うってつけのロールモデルがあったのだ。

「らい予防法」の規制力が多少とも形骸化していったなかでも、多くの療友がまだ“目に見えない鎖”で療養所に縛りつけられていた時期に、彼は車の免許を取得するために「軽快退所」をし、そのあと故郷の屋久島でトラックの運転手として働き、といったかたちで、豪放磊落に青年期を生き抜いている。ただ、彼の場合、根をつめて働きすぎると、ハンセン病の再発とはならないまでも、身体がこたえる状態になり、そのたびに、みずか

* ふくおか・やすのり，埼玉大学名誉教授，社会学

** くろさか・あい，東北学院大学准教授，社会学

本稿は「JSPS 科研費 25285145」の助成を受けた研究成果の一部である。

なお，語りの表記において，亀甲カッコ〔 〕は，聞き手による補筆。また，8ポの（ ）書きは，一般的に読み仮名を記しているほか，たとえば，「医局（そこ）」という表記は，語り手が「そこ」と発話し，聞き手が「医局」という意味で受け取ったということを示す。

ら敬愛園に戻っている。彼は、自分で「わたしはあらゆる仕事をした」と語るように、あるときには、療養所の療友たちとともに、静岡県の上野の井川ダムの工事現場に出稼ぎに行き、労賃をまったくもらえないという体験をしたり、鹿屋市内の理解あるガソリンスタンド経営者のもとで20年間、敬愛園からの通いの勤めもしたりという、多くの社会経験を有する。そのようにしながらも、合間あいまに、屋久島の海でのトビウオ漁に参加したり、父親亡きあと、屋久島で3年ばかり蜜柑づくりに精をだしたこともある。そして、年老いた母を見舞ったり、ハンセン病への偏見のゆえに離婚させられ「心の病い」を患うことになった妹のために、たびたび故郷・屋久島を訪れている。——その彼が、高齢化したいまとなつては自分も「社会復帰は無理」「敬愛園が終の棲家」と語る。彼にとって、ハンセン病療養所は、海が時化で荒れるときの避難港のような位置づけをもって所在してきたのだと考えられる。

ただし同時に、岩川さんは「政府のハンセン病政策は、悪かったことは悪かったんだ」と語る。前述のように、鹿児島県庁に異動した父親が、人生これからというときに療養所に収容され、退職をよぎなくされた。妹が離婚させられ「心の病い」をえて、精神病院への入退院を繰り返す生涯をよぎなくされた。自分自身、園内で結婚した妻とのあいだに子どもができたが「堕胎」をよぎなくされた、等々。「隔離政策」ゆえの被害を、自身も身内の者たちもモロに受けている現実があるのだ。

超高齢化とあいつぐ死去によりハンセン病療養所の入所者数が目に見えて減少していくなかで、「入所者自治会」の存続も危うくなりつつある現在、ひょっとすると星塚敬愛園最後の自治会長として、敬愛園の《これから》を案じ、苦闘しているのが、岩川さんの現在の姿なのかもしれない。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

第1回聞き取り（2007年12月）

11歳で敬愛園に入園

〔わたし〕昭和12年2月11日〔生まれ〕です。いま70歳です。出身は屋久島です。縄文杉のあるところ。

わたしは11歳のときに入園しました。

その当時ね、わたしの親父が屋久島の役場から県庁へ転勤になった。栄転した。そのためにわたしたちも、おふくろを中心にして——まだあのときは、わたしとわたしの妹と弟の3名だった。きょうだいは〔ぜんぶで〕5名なんですけどね。あとで〔弟が〕2人生まれたんですけど——鹿児島市に〔移って〕来て、親父は県庁に勤めました。〔わたしも〕鹿児島市の学校〔に通った〕。終戦後間もない頃です。その当時、校舎といっても、ただ雨をしのぐ程度の校舎だった。机が並べてあって、下はコンクリじゃなくて、土だった。それはいまでも覚えてる。ただ、野球というものが入ってきたってことがあって、わたしもすごく運動が好きだったんで、ああ、野球やりたいな、やりたいなって思ってた。わたしは、海も大好き。夏場になりゃあ、真っ黒になるほど海岸に行つて。磯御殿という、島津の殿様の〔別邸〕跡があつてね。そこに、ちよくちよく夏なんか行きよつた。

小学校5年生のときに、お袋が「あれっ、ちょっと、おまえ、なんだろうね」

って。顔に黒いもんが出てきた。いまから言えば、結節。結節というのは、大きくなって固くなるんだけど、その前の段階でね、色が少し付いてた。そういうことがあって、親父が仕事を半分休んで行きながら、病院に一日（いちんち）に2ヵ所ずつ「連れて行かれた」。その当時、終戦後だから、そんな大きな病院があるわけじゃない。普通の、ちっちゃい病院。10日（とおか）ぐらい通ったのかな、あちこちの病院。結局、皮膚科でも「なんの病気か」わかんなくて、あるところの先生が「大学病院ならわかるかもしれない」と。大学病院に行ったら、「鹿屋市のなになにというところに……」。わたしは「さっぱり」わからないけども、親父が「星塚敬愛園に行きなさい」ということを言われたんでしょね。それで、親父とふたりで——その当時ね、鹿児島から鹿屋に来るには、鹿児島〔港〕から古江港まで約2時間、ポンポン船で来て。それで汽車に乗ってえっちゃこらえっちゃこらと来て、永野田という駅で降りて。そのとき〔のこと〕あんまり覚えていないんだけど、まだ親父も若かったし元気だったから、ながあい道を歩いてきて。わたしは「どこへ行くのか」全然わからない。ただ、旅行なんてしたことないしね、親父と一緒に旅行できるという嬉しさだけでね。うん。〔行き先が〕星塚敬愛園なんてことも全然わからん。

〔そのときの父親に異様な雰囲気を感じたか、だって？〕感じないことはなかったんだけどね。この親父はね、自分たちの子どもには、自分が何をしようっていうときに、おまえが責任を持てばそれでいいんじゃないかっていうような親父だったんで、あまり多くを語らん。だから、〔ただ〕親父の後に付いて行った。そして、なんか、白衣を着た先生がいる。そのときに、消毒液の臭いがブンブンしたのはいまでも覚えてる。たぶんそれがね、2代目の塩沼〔英之助〕園長。眼科の先生。塩沼園長にとりあえず診察してもらって。じゃ、わかりました、ということで、今度、本館からこっちがわの医局のほうに来たわけ。そのときにも、やっぱり〔記憶に〕残ってんのは消毒薬の臭い。本館から入って、こう長い道があって……。〔そこに〕四角い仕切りがあって、そのなかに、消毒薬でしょうね、水溜りがあって。むこうから来るときは、みんな、そこに必ず長靴〔を履いた〕足を入れてって、そういうことだったの。それで、医局（そこ）で専門的な先生というか、女医さんに診断をしてもらって。らいに間違いないんじゃないかって。まあ、鼻にこう、なにか突っ込まれたりね。そして、このへんからメスをいれて、血を出して、それで〔菌の有無の〕検査（しけん）をするという、そういう形だったんだけど。そのときね、この病気だということを親父には言ったと思う。それで親父いわく、「おまえの病気は、あのお、まあちょっと検査中なんで、なんだかわからん」と。じつは、親父にはね、少し〔ハンセン病の〕知識（あれ）がある。というのはね、親父は、屋久島の役場にいたときに、敬愛園（ここ）に〔島の〕女性（おばあちゃん）を連れてきたことある。——そのおばあちゃんは、つい10年ほど前かな、社会復帰して亡くなったんだけど。——だから、らいという病気は知ってた、親父は。まさか自分の息子が、よりによってこんな病気になった、とゆうことだね。親父はわたしに病気そのものを言わなかった。

お医者さんの診察がすんだ後には、その頃「別館」と言いよったのかな、係の人がきて〔入園の手続き〕。〔わたしの〕岩川洋一郎というのは、これは本名ですよ。あとから聞いた話では、みんなそこで、「あなたは名前を変えたほうがいいよ」て。「なんでや？」「もし、病気がわかったときには、家族の方がご

迷惑をします」ということで、名前を変えなさいというのが通常らしいんだけど、たまたまわたしに言わなかったのは、たぶん、親父が県庁に勤めとったということで〔係員が遠慮をした〕。やっぱり公務員というのは案外、ねえ、偉いって〔言ったら〕おかしいけども。だから、〔係の人も〕あまり〔ズケズケ〕ものを言えなかったんじゃないかなと思うてる。

わたしが自分がこのような病気だということを知ったのは、3週間ぐらい後だった。その当時、少年舎というのがあって、わたしは児童だから、そういうところに入らなければいけないということ、わたしは全然わからなかった。それで、「お兄さん」が来た、わたしを〔連れに〕。ぼくはね、先生も言われたんだけど、「君はまだ子どもでもあるし、この病気はね、すぐ治るんだよ」「3週間ぐらいいたら、よくなって、すぐ帰れるからね」と。わたしはね、親父が後ろを振り返り振り返り、とぼとぼと行く姿だけはね、目の中にまだ焼きついている。ただし、わたしはね、まあ終戦後だから、友達というものはあまり、鹿児島にいてもできなかった。そういうことで、「君と同じぐらいのね、子どもたちはたくさんいるところだから、さびしいことはないよ」という形で、そのお兄さんが言ってくれた。それでわたしも〔とにかく自分がなんかの〕病気としかわからない。親父はとぼとぼと帰っていくんだけど、「おまえが病気が治ったときは、すぐ迎えに来るからね」ということで、親父は帰っていった。

そのときのさびしさはね、あまり覚えてない、じっさい言って。ということではね、すぐ少年舎に行った。病気の進んでる子もいたと思うんだけど、記憶にそれ全然ないの。少年舎に、その頃、4つ部屋があって。一部屋、12畳ぐらいに、5名くらいいたのかな。〔みんなで〕20名くらいいた。〔ほかに〕少女舎というのがあって、そこは〔女の子が〕15、6名いたのかな。少年舎（そこ）には、「お父さん」という方がいて、「お兄さん」という方がいた。それでわたしはたぶん、初めてだったから、寮父（おとうさん）の目の届くところで、2号〔室〕にいたの。

それで、挨拶というか、そのお兄ちゃんがみんなを集めとって、「今日、鹿児島から新しく来た岩川（いわかわ）洋一郎くんだから、みなさん、よろしくお願いしますね」と。それで、夕食を一緒にという形だった。〔少年舎の〕真ん中に食堂があって。大きな、15、6畳の板間があって、そこに莫塵（ごご）を敷（ひ）いて、そして机がずっと並んでる。10名ぐらいずつ2列になってね。で、当番がいて。見たことない食器、兵隊さんが使っていた食器の払い下げでね。それにご飯があって、おつゆがあってという、そういう食事だった。不思議にね、そのときの食事はすごくおいしかった。麦ご飯だったけども、おつゆの中にね、鮭（さけ）の缶詰が入ったことを覚えてる。すごくおいしくてね。というのは、食べ盛りですよ。みんな、わいわいわいわい言いながら食べて。手の悪い子もいた。口の悪い子もいた。でも、わたしはなんにも感じなかった。なんでだろうなっていうことは頭にあったんだけど、いまから思っただけで不思議でたまらない。

そういう生活を続けながら、〔園内の〕学校に行くことになるんだけど、3週間ぐらいてから、屋久島〔出身〕のおばちゃんが訪ねてきた。「あんた、屋久島なんな？」って。その人は〔後遺症で体が〕不自由だったから、そのとき初めて、オッと思った。自分の病気は何だろう。わたしもその人と同じ病気

だとは、全然まだ思っていない。「お兄ちゃん」も何も言ってくれない。「お父さん」も何も言ってくれない。そういうことがあって、その人は手も悪い、鼻も……。でも、その人〔自身〕は何とも思っていないわけ。〔療養所にいれば〕普通だからね。わたしは、いままでそういう人をあんまり見てないし。治療にもその当時は、あんまり行っていない〔から、病気の重い患者さんにはあんまり会っていない〕。ただ、「大風子（たいふうし）」っていうのがあるから、おまえもね、ここに来たからには、体を良くするために、ちょっと痛いけども〔打て〕」っていうことで〔打ちました〕。もう痛いなのんのって飛び上がりよった。大風子、お尻に打つんだけど。それ、いまから思うとね、油。菜種油のような。よく揉まないと化膿するっていう、そういう注射を打った。——そのとき初めて、わたしは、そのお父さんという人にね、「いま、変なおばちゃんと会ったんだけど、ああいう人はたくさんいるの？」って聞いたの。「ああそうか、おまえ、〔自分の〕病気知らないんだな」っていうことで、「じつはね、もう仕方ないことだから〔教えるけど〕、おまえは、らいという病気なんだよ」。わたし自身、らいという言葉（こと）を聞いたこともなければ、話も聞いたことない。ただ、いまから思えばね、桜島のむこうに牛根というところがある。そこに、わたしの親父の、腹違いの妹（おばさん）——まだいまでも生きとるんだけど——おばさんのところに枇杷（びわ）がよくなるんで、終戦後に、妹とよく、ポンポン船に乗してもらって、おばさんのところに行ったときに、「おい、ご飯だよ」というときに、暗いところから、ごそごそ這うて〔出て〕きた〔人がいた〕。ウッ、この人は何だろな、と思った。いまから思えば、その人、ハンセン〔病〕だったの。〔その人は〕後で、敬愛園（ここ）で亡くなったんだけど。〔わたしは〕そのときに初めて〔ハンセン病のひとを〕見たんでしょうね。

〔わたしはここで〕学校に行きだした。学校は寺子屋式で、1年生から6年生までと、中学生の1、2年生と、同じ教室（ところ）で勉強しました。そんなに〔子どもたちを教える先生役の入所者で〕師範学校を出た人もいたし、東大を出た人もいた。すごい哲学者よ。その人はね、いつも本を読んでいた。——そういう生活をしながら、わたしはなぜ、心の中にさびしさがなかったかという、みんなで野球をやった。〔野球が〕大好きだった。そして、親父がね、日曜日にはね、毎週来てくれた。ポンポン船に乗って、そして、汽車に乗って。こんどは、歩いてくるのは大変だから、それで荷物があるから、自転車を〔船にも汽車にも〕乗して、〔永野田駅からは〕自転車で来たの。そして、日曜日に来れんときは、〔平日に〕学校のほうに〔会いに〕来て〔くれた〕。〔わたしが〕学校にいるときには、こっちから親父が手を振るの。親父が今日は来るんじゃないかなあっていう、なんか気がしたときには、親父が手を振っとるのを〔わたしは目ざとく見つけて〕、「先生、面会が来たけん、いいですかア」っち言って。「ああ、いいから行ってこい」っていうことで。あすこの、楓公園っていうところがある。——あすこ、いまでもね、思い出されてね。〔2003年11月、敬愛園で開催されたハンセン病問題に関する〕検証会議のときに、わたしはそのとき〔自治会の〕副会長だったから〔園内の説明役を仰せつかって、委員の〕みなさんにね、自分はこうだったんだと、そういうことを言いながらね、心の中で涙が出てた。

そのときになって初めて、自分が、らいという、ほんとに、世にも不思議な

病気にかかったということ〔もわかって〕。そのために、親父は、その当時〔普通の〕ひとは見たこともないようなお菓子、たとえばチョコレートとか持ってきてくれたり。楽器をね、ギターも持ってくる、マンドリンも持ってくる。それでわたしはね、いまでも、うちでギターをときには弾いたりすることもあるんだけど。あのとき親父がどれだけ難儀しながら来たかということ、いまから思えば〔よくわかる〕。——みんなね、うらやましがるン。「おまえはいいなあ」って。だって、そんなに面会に来る人なんてあんまりいない。〔来てもせいぜい〕1年に1回か2回。わたしは、その当時は、親父はなんで〔そんなに頻繁に〕来るんだ〔ろうと〕。ただまあ、おまえがさびしがつとるからという、そういうことだろうと思うとった。しかし後から思えば、やはり、こういう病気にかかって大変だな、ということ〔だったと思う〕。それでまあ、2年ぐらいして、〔園内の学校が教育委員会の認める正式の〕分校になって。

〔敬愛園では、面会に来た肉親と直接ふれあうことができたのか、だって？〕ご存知のようにね、熊本では〔昭和29年に〕龍田寮事件なんてのがあったけれども、ここでは、星塚敬愛園が昭和10年に立ち上げてから、もう1年2年のうちに〔入園患者が〕200名ぐらいとかつていう形になるんで、そのかんに〔ハンセン病の〕お母さんが〔外の社会で産んだ〕子どもを連れてくる。そういうときに、何の問題もなく、ずっと未感染児童の受入（あれ）をしたというそういうことがあるんで、地域との関係は、全国でわたしは一番じゃないかと思う。——〔ここでも面会室というのが〕あったのはあったらしいんですけど。ただ、あのときは、わたしたちは「別館、別館」って言ってたけど、〔面会人が事務〕別館を通すれば、そのような〔面会室での面会という〕形。わたしの親父はそんなことしない。〔別館を通さずに〕ズカズカ入ってくる。たぶん、公務員というそういう自負（あれ）があつて……。なにより、その前もここに来たということがあるんで、そのへんはわかっている。たぶん、それは〔昭和〕30年代の前半まではあったんじゃないかな。それは、別館（ふくし）を通せば、そこに面会室というのがあつて。それで、その人たちが帰るときには、必ず消毒をして帰ると。そういうことでしょう。たまたまその牛根のおばちゃんが〔わたしに面会に〕来たときには、枇杷を持ってきたんだけど、2、3回来たかな。そのときはいつも別館（ふくし）を通して来るもんだから、わたしは向こうの面会所に呼ばれて〔面会〕した、ということは覚えてる。〔そういう場合でも〕敬愛園（ここ）の職員は〔そんなに監視は〕ひどくなかった。だって、わたしが成人してからのことになるんだけど、たとえば、鹿屋〔の町〕に行っても、あ、この人は敬愛園の人だな、と思っても、普通、まあわたしたちもある程度健康だったから〔つらく当たられることはなかった〕。〔町に〕行っても、標準語を話す人は敬愛園〔の入所者〕だと〔思われると〕いうことで、みんな鹿児島弁を使いよった。買い物なんかに行くときに。そうすればもう、なにもそういうことはなかった。ご存知のように、敬愛園というところは、そういう形でね、地域の人とはすごく交えている。だから、地域の人たちのところに、食糧事情悪いときには、〔農作業の〕加勢に行つて、お芋さんをもらってきたり、お米をもらってきたりという、そういうこともあるし。また後では、密造酒なんかを作つ〔て分けてやっ〕たりという、そういうこともあったらしいんだけど。

そういうことで、分校になってから、わたしはすごくスポーツが好きで、た

またまテニスが流行り、野球も流行り。それで、中学校2年、3年の頃になれば、わたしを引っこ抜きに来るんですよ。〔教室で〕勉強しとるときに。というのは、テニスなんかすれば、やっぱり賞品とかなんかあったりするんで、「おまえと〔組んで〕やれば優勝できるから」って言って。だいたいダブルスが多かったからね。そして、野球のときには、地域から野球のチームが来る。わたしも堂々と「先生、野球をやりますから。行ってきます」って。これは黙認だった。〔わたしは〕体は大きくないけども、運動神経、すごくよかった。

それで、〔昭和〕23年に、プロミンが始まりましたからね、敬愛園（こちら）では。ほんとうに、みんな歓喜して喜んだ。〔わたしが敬愛園に入所する直前に〕プロミン獲得運動なんてあったのはわたしは知りませんが。児童は優先的ということで〔治療してもらいました〕。あらゆる人たちが、たとえば、手に傷がある、熱こぶが出る、足に傷がある、それがね、みるみるうちによくなる。あれだけはほんとに、子どものわたしすらびっくりした。

〔プロミンを打って、ひとによっては〕反応がすごくある。それはあるのはあるんだけど、結局はそういう人も、目をやられない限り、きれーえになった。プロミンを打つとね、バァーッと出ちゃう人もある。全然出ない人もおる。ただ、専門的なことで〔言う〕と、結節らいと斑紋らい、混合らい〔という病気の型がある〕。わたしは、どっちか言うたら、混合〔らい〕。それで、うちの家内なんかは、手だけが悪くなる人。そういう人たちはね、プロミンが効いたとかなんとかいうことは、わたしはわからない。ほんといって、効いたのかなあ。

先生もご存知のように、〔それ以前は〕治らい薬なんてなかったわけ。それで、〔おなじ病人のなかで〕元気なひとが弱いひとを看るっていうのは、療養所としてそれが通常だったわけだから。治療薬がなかったもんだから、どうしても、傷ができ、そして、指が1本ずつ、枯れてくるの。ご存知のように、抹消神経〔の麻痺で〕熱いのがわからない。わたしもね、やっぱり〔手が〕歳とともに少しずつ悪くなってきた。

社会復帰後、町会議員をした父／親父もハンセン病だったというのは疑問だ

どこまで話したっけ？〔そうそう、わたしが〕学校を出るときにね、親父がね、楓公園のあすこに座って、ふたりでお袋が作ってくれたおにぎりを食べながら、膝をまくった。親父が「なんかおかしいんだよな」。〔親父の〕膝（ここ）に斑紋のようなものがあって……。わたしもう中学3年生だから、ハンセンというものの知識はある程度、見たり聞いたりしてわかっていった。「かりに、親父、それが斑紋だとしても、いまはプロミンという特効薬（あれ）があるから、すぐ治るよ」と。「診察〔を受けることに〕しようか」ってことを、俺のほうから親父に言った。親父も「そうだな、そんないい薬があるンであれば」ということであつたんだけど。ただね、一つ腑に落ちないのはね、もうちょつと何年かして、わたしが社会復帰するんだけど、それで〔実家の〕床下を掃除しようとしたところ、プロミンが出てきた。ということはね、親父は俺に言う前に、自分で病気じゃないかと思って、プロミンをどこで手に入れたのかねえ。それがね、穴を掘ってそこに埋めてあつた。〔話を戻すと〕親父も、とりあえず診察をすることになって、それで〔診察の結果、ハンセン病に〕まあ間違いないだろうと。そういうことで、親父は「琴」という病棟に入った。そこ

は4人部屋「だったかな」。それでまあ何年かするうちに、すごく親父は頭もいいし、県庁にいたから「情報を集めたんだと思う」。お袋も鹿児島にいたし、「下の」弟（こども）たちがいたもんだから、「残された家族の」補助的なことは、援護金のような形でたぶんあったと思う。わたし「自身は」知らなかったけども。

「ハンセン病と診断されたから」仕方ない、「親父は県庁を」辞めて、敬愛園（こっち）へ来た。親父はね、無学で。「上の」学校は出てないんだけど。「尋常」高等「小学校」2年までなんだけどね。県庁で主事までになった。それだけ、やっぱり、努力家だった。すごく頭がよかった。いまでもわたしは誇りに思っとる。で、辞めて、こっちに来て。それで、「鳩」という一番重病な病舎（ところ）でね、付添（看護）をしとった。かたわら、暇なときには彫刻をやって、鷲を彫ったりね。まだいまでも屋久島のうちに親父の作品（あれ）はあるんだけど。「親父は」もう亡くなって13年になる。親父は80歳で亡くなった。わたしが22のときの子供（あれ）だから、「発病したのは30代の」まだまだ働き盛り。

それで、ちょうど「わたしが中学校をでるころ、長島愛生園に」新良田教室（こうこう）ができるんだが、「話に聞くかぎり」あそこはひどいところだったですね、差別が。先生なんかはもうすごくて、どうしようもない学校だった。「生徒は」職員室も入れない。先生なんかはマスクをしとって、どうしようもできない。「生徒の」おカネだって消毒「水」なんか「に浸けさせた」。——それで、親父は「おまえも高校だけは行っとったほうがいいんじゃないか」ということだったんだけど。「親父、俺はね、とりあえずお袋が難儀しとるけん、高校（がっこう）に行かなくて、「ここから」出て、免許でも取って、それでお袋に加勢して」。もう、弟がいるから。そのとき「きょうだい」は5名になっとった。わたし長男で。ということ「を」心づもりしよったところ、親父のほう「が」先に社会復帰しちゃった。亡くなるときにも、親父はどね……、普通、ハンセンというのはどっかになにか「後遺症が」あるんだけど、「親父は」完全にどうもない。俺は、親父はたぶんね、ハンセンじゃなかったんじゃないかなあと思ってる、いまは。その当時は「菌」検査なんて、お医者さんが顕微鏡で見るとか見らんのか知らんけども「けっこういい加減だったと思う」。親父のおっかさんが、まあ95歳で亡くなったんだけど、あのひとはここへ何回か面会に来て、「おらの息子は違うよ、あれは食いあたりだ」って。「親父は」すぐ良くなった。それで最後の最後まで、ほんと、なにもなかった。たぶん、あれは「この」病気じゃなかったと思う。

親父は社会復帰して、退職金でね、会社を興してやったんだけど。お袋はそのままずっと鹿児島にいたから。子どもたちもおった「から、生活費を稼ごうとしたんだね」。まあ1年は続いたのかな。でも残念ながら、倒産しちゃって。わたしもそのときは、社会復帰しようかなって、そういうときだった。親父は、会社はダメになったから、屋久島に帰ろうかなあ。と。「わたしは親父に」「親父、そのほうがいいよ」と。屋久島はわたしも大好きなところ。海が好き、山が好き、魚釣りが好き。ぜひ親父には帰ってもらいたいと思っとった。

親父はまだ「しばらく鹿児島で」なんか仕事を「してて」。それで、「わたしが」お袋とちっちゃい弟たちを連れて、ポンポン船で「先に屋久島に帰った」。親父も2、3ヵ月したら来たんですけどね。で、「屋久島に」来て、親父は、部

落のために……。集落が 250〔戸〕ぐらいの、ちっちゃな部落なんだけども、温泉が出て、すごくいい。そこで親父は、ぼちぼち、最初何ヵ月かやって、その部落の区長を 5, 6 年したのかな。

で、親父の話からするんだけど、親父は今度は町会議員になった。〔選挙に出て〕2 番で通っちゃった。それと一緒に今度は、農協のほうで仕事をしだした。農協〔の理事〕長というのは県議員しとってね、鹿児島へよおけ行く。結局は親父が専務理事で、その仕事をしとった。〔農協の〕専務理事をしなから、町会議員をしたもんだから、部落のためにはすごくして。その代わりお袋は難儀しよった。親父は、自分のことはさて置き、他人（ひと）のことばあーっかやりよった。

〔親父が敬愛園に入ったことを部落の人はみんな知っていたか、だって？〕知ってる。知ってる。親父が最初に立候補するときに、わたしもそんなときは社会復帰しとったんだけど、体を休めようかなと思って、ちょっと敬愛園（こっち）に入ってた。そのかんは出たり入ったりしとったンよ。それで、「おまえも加勢に来んか」と。ああ、いよいよ来たなと思って。わたしはそのときには、鹿屋で 20 年間働いとったときだったんだ。わたしも、ちょっとおカネもとったもんだから、親父に少し持ってって〔やろうと思って〕、車で応援に行っただ。それで、最初は、2 番目で通って。次のときに、4 年経ってからね、また加勢に行った。そしたら親父もだいぶん名があがってきとって、敵ができるわ、〔競争〕相手ができるわ。この選挙というのは、島はすごい。従兄弟どうしても、選挙で血の雨が降るといふぐらいで。夜、寝てるときにね、「オーイ、出てこォい。おまえ、殺したる！」「親父、なんか言ってるよ」「かまわん。ほっとけ、ほっとけ。ただ、あんなして吠えてるんだ」って。なんか、親父のライバル〔候補〕の選挙参謀が来て、あんなことを言うんだって。まあ、起きてきて、あんまり親父はアルコールのほうダメなんだけど、〔飲みながら〕親父にわたしは聞いたの。「親父、鹿屋といえば敬愛園。親父が敬愛園にいたということはみんな知るとるんだけど、そのことに対して、おまえはらい病を患って、敬愛園から帰ってきて、選挙に出るンか、と言われたときには、どうするのか。言われたことはあるか？」と。「ない」と言う。やはり〔それは〕屋久島という土地柄かねと。〔ライバルを〕蹴落としても〔自分は〕選挙に上がりたいというのは、これは議員の心情。そして親父が言う、「そういうことを思っとなら、俺は最初から選挙に出ない。その代わり、俺はすることはするよ。俺がすることはみんなが見てくれとるから、俺が敬愛園出身だとか、らい病だったからといって、みんなは俺のことをなんとも思わない」と。すごく自信があったんだね、親父は。いまから思えば、ほんとに、不思議な人だよな。

〔全国のハンセン病療養所〕13 園のなかで、ハンセン病〔元〕患者が市会議員に出た、とかっていうのは〔ほかでも〕あるよ。でも、あんな田舎でね、3 期 12 年間〔議員を〕した。親父は後進に道を譲るために、みなさんに「まだやってくれ、やってくれ」と言われながらね、「俺もいつかは身を引かなければいけないんだから。後継者（つぎ）を作るのも、政治の一つだ」と。わたしは〔その〕親父〔の言葉〕に感銘を受けて、いまでも尊敬をしとるんだけど。だから、わたしが 50 歳の頃にはね、「おまえも、親父の跡を継ぐために、早く帰って来い」と、部落の人がそう言うんですよ。わたしが敬愛園（ここ）におって、ハンセン〔病回復者〕だということをわかっていながら。

じつはね、親父はね、政治のほうもだけどね、そういう片手間、いま問題になつとる年金〔加入の勧め〕とか、保安協会の会長とかっていうことを、他人（ひと）のためになんとかかんとかしてやってた。それで、自分の〔得になる〕仕事はセンわけだから、お袋が難儀しよったんだ。この前、お袋〔の具合〕が悪かったんで、わたしちょっと〔屋久島に〕帰ったんだけど、「あのときにねえ、あんたのお父さんから、年金に入れ、入れ、入れって、口がすっぱく〔なる〕」ほど言われた。〔そのときには〕入らなかったんだけど、でもその後何年かして入ってね、ほんとにいま助かってる人が何名もいる。だから、〔お父さんは〕みんなによくしたんだ」って。わたしのことは知らんでもね、親父のことはまだいまでもみんな屋久島の人は知つとる。それで、親父の後ろを見てるもんだから、わたしにも「50歳の頃までに帰れよ、帰れよ」と。まあ、イトコ、ハトコが亡くなったときに、わたしもそういうことでは屋久島に帰ってさ。ここも〔ひとが〕死んだときにはある程度そういうことは大事にするんだけど、やっぱり田舎になればなるほど大事にするよ。〔そういう〕お葬式で〔もう〕親父がいないときにね、「おまえ、挨拶せい」って。「挨拶が親父よりうまい」と。挨拶がうまければ、頭がいいかっていやあ、とんでもない。仕事ができるかといえば、そうでもない。ただ、わたしの性格は、知人に会おうが、大臣に会おうが、もの怖じない。そういうところが親父に似とると。その血の繋がりがああるンかなということ、すごくそれには感謝しとるんだけど。「だから、おまえなら、田舎のことをしてくれるから、〔帰って〕来い」と、何回言われたか。でも残念ながらね、〔ここで結婚した〕わたしの妻がいるんだけど、妻がね、やっぱり〔後遺症で〕手が悪いんだ。〔その妻と一緒に屋久島に帰るというのは、ちょっと難しい。〕

手の後遺症を気にする妻

また話はあっちこっち飛んじゃうけども、いま、わたしは70歳ですけども、妻はわたしより5つ上です。同じ屋久島〔出身〕です。若いときはすごく美人だった。そこに惚れたのかどうかはわからんにしても。ただ、どこに行くにもわたしと一緒にないと買い物には行きたがらない。というのは、わたしが、親父と一緒に、なんでも気が利くもんだから。〔家内は〕具合悪くて、1ヵ月ぐらい前に入院したのかな。今日ちょうど退院したの。——〔結婚したのは、わたしが〕28ですね。わたしの妻はね、なんていうか、自分の気持ちの中に、誰か見とるなあと、そういう気持ちがどうしてもある。

それで、藤原〔頼高〕っていう、俺の大好きな、大好きというより、大先輩、兄貴分のようなのがいて、それが〔敬愛園の入所者自治会の〕会長をした。喜界島〔出身〕の人だった。東京の大学を出とった。すごく頭のいい人だったんで、「まあ、おまえは〔自治〕会長にはなれんな」と言いながらも、わたしに〔なんでも〕教えてくれた。それは平成4年の話だ。そのときからわたしの政治が始まったんだけど……。それでね、敬愛園はね、ちょうど30年前からゲートボールが流行った。すごく強い。強いというのは、ゲートボールはね、90パーセントが〔作戦次第〕。みんな、玉が当たったとか〔ゲートを〕通ればいいんだ〔と言う〕けども、作戦がすごく〔大事〕。それで、その藤原さんという人がすごく頭がよかったから、作戦を考えて。敬愛園はね、全国大会で3回ぐらい優勝してる。全国大会だよ。敬愛園（ここ）には、東のほうに〔ゲー

トボールの〕グラウンドがあるんですけども。もうそこは朝から晩まで、カンカンカンカンカン。その当時ね、ゲートボールの話をよおしない人は敬愛園の人じゃないぐらい言われた。その人がわたしを気に入ってくれて、わたしが〔選手に選ばれて〕試合に行った。わたしの家内も、おまえもやれということで、外に、一般社会に〔出ていくようになった〕。〔また、敬愛園のチームが〕強いから、〔外から〕みんな〔ここに〕来る。それで、鹿児島〔県〕の大会に行きやあ、もう優勝は必ず。6チームぐらい出とったけど、1, 2, 3〔位独占〕とか。だから、わたしたちと試合をする〔組み合わせになった〕ときには、「おい、相手はどこや?」「あつ、敬愛園とか」ちゅやあ、みんな「胃が痛い」って、もうそのへんにいなかった。

その藤原という人が、「ゲートボールはここだけじゃできん。やはり、外に連れて行かないと、どうしようもできない」と。手は悪いだけで、手は利くから、ゲートボールできる。それで、ゲートボールの玉は丸いでしょう。審判というのがいて、「はい、1ゲートを通りました」ということで、こうしてこう、手で握って返すんですよ。ただまあ、確かにハンセンの人たちにとってみたら、最初はね、足でこういうふうに〔蹴って〕返し〔てよこし〕た。それで、わたしたちが強いもんだからね、次にはね、こういう具合に〔恐る恐る〕握る。それからね、もう、あまりにも強いために、今度はもう、普通〔に手で握って返すようになった〕。それを見ながら、わたしの家内は、〔自分でも〕手を出さざるをえないがね。そして、人の前に出〔るようになった〕てね、少おしだけは〔気持ち〕違った——気持ちが違ったんじゃないくて、少し慣れが出てきた。ゲートボールするときには、手袋に穴をあけなきゃいかんちゅうことで、もう手が悪いということがわかる。〔ただ〕残念ながらいまでもやはり、その気持ちは変わらん。いまは〔世の中に〕身障者はたくさんいるんだし、敬愛園の人だと思っても、べつにみんながどうも思っていない。「まあ 70, 80 のおじいちゃん、おばあちゃんの心のなかには、昔は大変な病気だったよね、汚い病気やったよね、という気持ちはあるかもしれないけども、いまは、ハンセンの人だなど思っても、ほんとうに嫌う人っていないよ」と言うんだけども、そういう〔引け目に思う〕気持ちはまだ取れませんか。

たまたまわたしの療友（ともだち）が沖縄にいて、これも 40 年〔来〕の盟友なんだけども、その奥さんがね、手も悪い、足も悪い。それで空港まで車で迎えに来〔てくれ〕たの。びっくりしちゃったですよ。えっ、なんでだろう？ オヤジももちろん免許は持とったけども、もう〔体が〕不自由〔で、もはや自分では車の運転はしない〕。それで、ステーキでも食おうかということで、ステーキ屋に行った。おカネを払うときにどうするかと思って、見とった。そしたらバッグを、片手持てないから、ここでこうやって。それをうちのも見えておった。どうするんだろう？「ここにおカネが入ってるから、どうぞこれから取ってください」と。そしたら、店員さんも慣れたもんじゃ。「あ、いいですか」と。俺は様子を見とって、〔家内に〕おまえもあんなにしたらどうだということを言いたかったんだけども。いくら友達〔でも他人〕の前で、そういうことをね、言うわけにいかんかった。ここでもそんなことはいっぱいあるんですよ。療友（ともだち）がね、足も悪い、手も悪い人が、どうやるかと思うひとがね、行ってね、買い物をする。わたしの家内の、これ、悪口じゃなくて、そういう人もいるということをね、わたしは言いたいということなんだけども。

わたしが最初に運転免許を取得した

わたしは在園年数 58 年のなかで、20 年ぐらいは鹿屋に働きに行ったし、7、8 年は社会復帰しとったな。〔外の社会と敬愛園とを〕行ったり来たりして。

昭和 30 年代の初めまでは、敬愛園（ここ）〔の住所〕では〔自動車の運転〕免許を取れなかった。わたしがここをなぜ出たかっていったら、免許を取りたかったから。それで、わたしが出て免許を取った後で、こんどはみなさんが、「おお、あれも免許を取ったらしいぞ」という話が伝わって、近くの住民の住所を借って、単車の免許からみんな取りだした。それで、今度はね、奇抜なひとがいて、三輪車かなんか、練習用にということで〔寄贈してくれて〕。まあ、〔入所者のなかに〕免許を持ったのが 2、3 名いて。その人たちが教師で、教えてもらって。最初、地域のひとたちの住所を借って、免許をとった。それから 4、5 年してからかな、ここの住所で免許を取れるようになった。

わたしが、そのねえ、見せびらかすっていうんじゃなくて、一步早く社会復帰して、免許をとって、車に乗ってスーッと来るのを見とって、みんな羨ましかったって。22〔歳〕のときかな、免許とったの。一番最初にわたしが取ったと思う。それを見てね、みんな、ほしいな、ほしいなと思って、みんな取ったという〔こと〕。

鹿屋のガソリンスタンドで 20 年働く

じゃ、今度は、わたしの鹿屋での話をしましょうね。ここにいま、わたしと同じ〔自治会の〕常任委員で、山本というのが——これは偽名使ってるから〔名前をだしても〕かまわん——いるんだけど、これもわたしと 40 年来の療友（ともだち）。それで〔若いとき〕、元気だから、仕事をしたい。〔療養所内でもらえる〕おカネは、あの当時〔慰安金が月に〕500 円だったのかなあ。まだ二階堂年金は来ないから。——〔じつは、わたしの〕親父がね、二階堂〔進〕先生のね、屋久島の後援会長だったんです。親父が亡くなったときに、二階堂先生、〔屋久島の〕うちまで来てくれた。——二階堂年金というのは、二階堂先生が田中角栄〔首相のときの自民党の〕幹事長のときに〔ハンセン病療養所の入所者が障害年金をもらえるようにしてくれた〕。それまで、慰安金なんていうのは〔月額〕500 円。「え、いくらなの？」それ以上、俺わからん。おカネのことはみんな女房が管理（あれ）してるから。

〔それで〕なんとかしておカネが欲しい〔ということで〕わたしと山本が求人〔広告を見て鹿屋の〕スタンド、給油所〔に行った〕。じつは、住所も誤魔化して。「西俣にいたんだけど、仕事をしたい、どうでしょうか」。歳は 32 か 3 だったかな。その社長も深くは聞かなかった。「ちょっと汚れるっていうこともあるし、集金とかなんとかっていうのもありますよ。〔それでもいいですか〕」ということで、「じゃ、明日から来たら」と。そのときはわたしたちはまだ単車しか持ってなかった。やっとかつとエンジンがかかるようなカブで、ふたりで帰ってきて。「ヤマよ、どうせバレル。敬愛園ということを〔正直に〕言おう。それで来るな、というときは〔仕方ない〕」。——そのときはまだハンセンなんて言っていないよね。敬愛園といえ、やっぱ、らいということですからね。もう〔バレて〕断られるよりは、いまのうちに言っとったほうがいいんじゃないかと。ふたりで相談して。それで明くる朝、ちょっと〔ほかの〕従

業員より早く行って。「朝早くから、社長、すみません」と。社長は起きとった。「住所を誤魔化してすみません。じつはわたしたちは敬愛園からなんです」って言った。ハハハっち、社長笑って、「最初からわかっていたよ」って。そのとき、世の中に、らいとわかっとなって、働きに來いと言う人がいたということに対して、わたしはびっくりした。そのとき、「エエッ!」という、そういう驚きの言葉も出ましたし、すごくその社長に感銘を受けた。

それで、わたしは 30〔ちょっと〕でしょ。みんな〔もっと〕若い連中でしょ。わたしは商売はしたことなかったけども、口八丁手八丁だったわけ。山本はわたしより数倍も頭がいいんだけど、口のほうは少し重い。仕事は真面目。わたしはちゃらんぼらん。だから、お客さんともね、いい調子や。だから山本は〔接客の〕仕事は合わんなあと。緑化の〔仕事の〕ほうに〔まわった〕。3ヵ月ぐらいたったときに、〔わたしは〕社長から呼ばれて、「おまえ、マネージャーをやってみらんか」と。マネージャーというのは〔スタンドの〕責任者みたいなもんだけど。「いやあ、社長、わたしは敬愛園から通ってるんだから、そりゃあ無理よ」って。「いや、どうしても」って言うから、「社長がそばにいつもいるのであれば、責任——責任はもちろん取るけど、若いもんを使うっていうのは、どうかな」って。わたしはあんまり人を使ったことないしね。人から使われるのもやりたくないし。〔わたしは〕親父と一緒に、自分のことはいいけども、他人（ひと）のために一生懸命なんやかんやするほうだった。たとえばお客さんがなんか困ってるときは、もうタダでもいいからやってやろうというところがある。「おいおい、おまえ、ああいうときには、お礼をもらうんだよ」っていうことを、よく社長から言われたんで、〔わたしの〕そのへんを見たのかな、と思ってね。〔社長のやってるガソリンスタンドが〕2軒あって、とうとう1年後（あと）には、2軒までの面倒を見なくちゃいけないって言われた。そういう形でわたしはすごく信用……、まあ、信用しないと〔店をまかせるなんて〕できないわね。灯油とか重油とかってのは、配達なんかでも自分でできる。わたしたちは、そのことに関しては塵ひとつありませんよね、なにか〔やましいことを〕しようという気持ちが。それはやはり、こういう療養所（ところ）で暮らしとって、みんなのそういう姿を見てますからね。だから、そのへんを、やっぱり、社長は見てくれたのかな、と思って。それで、その社長〔のもとで〕20年ぐらいたったしは〔仕事を〕しとったんですよ。

それで、2、3日前に〔今年も〕年賀状を書く段になって、去年の〔社長からの〕年賀状が出てきて、〔そこに〕社長はこう書いとった。「いつも、テレビで見えています」と。たぶん〔星塚敬愛園〕70周年のときの映像が流れたんでしょう。「〔岩川さんの〕すごくいいスピーチを聞いて、わたしはテレビへ向かって拍手しました」。わたしはすぐ返事（てがみ）を書いた。「わたしの人生は、社長から教わったんだ」と。〔でも、いま思えば、そのとき〕会いに行けばよかった。社長はそのときはまだ具合がよかった。〔最近耳にした話では〕その社長も糖尿病でね、片足を失った話を聞いたもんだから。——日曜日だとか盆正月は、わたしが出なければ、誰も出る人はいない。それで、わたしはいつも、帰るのは〔暗くなってから〕7時か8時。普通5時に〔終業〕なんだけども、わたしの場合は集金をしなければいけない。普通の集金だったら女の子でもできるけども、不良債権というのが沢山あった。わたしは敬愛園にいるから、そういうのはなぜか、あんまり恐怖を感じなかった。だから、「みんな困って

るのはお互いさまですけども、借りたものは返すっていうのは、これは人間の法則だから、ということで「お願いします」。とりあえず 1,000 円でもいいです、2,000 円でもでもいいです。「払ってください」っていう形で。それがわたしの仕事の内容だった。だから、わたしはね、人生を教わったのは、その社長に教わった。彼もね、大学までは出てなくて、鹿屋の農業高校が最後だと思う。すごく頭がよくて、すごく世の中のことを知った。わたしの家内を初めて連れていったときにね、「社長が」従業員（てんいん）に「おい、おまえ、ちょっと行って、花束買ってこい」って。何するかなあと思ったら、うちの家内にね、花束をあげるんですよ。うちの家内が喜んでね、社長から花束をもらったって。そういうことがあって、わたしはほんとに、この、人には恵まれたと。

静岡県 dams 工事現場まで出稼ぎに

その前にね、もう一つある。わたしが社会復帰して、昭和 20 年代の後半、〔昭和〕26, 7 年。このへんでも、〔昭和〕20 年代の後半から 30 年代にかけて、他の療養所（ところ）もでしょうけどもね、出稼ぎがあった。たとえば〔この近くに〕高隈ダムというのがある。〔その〕人夫（にんぷ）〔賃が〕当時〔1 日〕200 円ぐらいかな。それで、今度はね、敬愛園（ここ）にいた入所者（ひと）が、それは名前は言わないけど、間（なか）に入って、秩父の建設会社がね、静岡県の安倍郡（あべぐん）の井川村（いかわそん）というところでダムの試験掘りをするので人夫を募集してるっていうことで、自分たちのカネを使って静岡まで行って……。山奥。南アルプスがそこまで見えとった。とりあえず、わたしは、そこを根拠にして、東京で将来は働くつもりだった。鹿屋（ここ）で 200 円か 250 円ぐらいの日給（きゅうりょう）で、そこでは 700 円くれるという約束でね、とりあえず行った。行って〔最初に〕変だなと思ったのはね、トラックで迎えに来ちゃったんよ。バスで迎えにくるのかと思ったら、トラックだもんね。まあ仕方ねえやと、トラックに乗って。雨が降りだしたんでどうするかといやあ、シートをかぶされて、井川村というところに行った。行って、まず驚いたのは、むかし映画でよくやった、飯場。そこは、まだよかった。ご飯は腹いっぱい食べることができた。おかずもまあまあもらった。それで、若者頭が来て、「二組にしたい。ここから車で 1 時間ぐらい行って、歩いて 3 時間ぐらいのところに、現場がある。ここでは 700 円だけでも、むこうへ行きゃあ 1,000 円の日給（きゅうりょう）をくれる」。1,000 円もらいたいから、7 名か 8 名ぐらい、それに応募（きぼう）して、早速、明くる日〔トラックで〕1 時間ぐらい行って、〔徒歩で〕3 時間ぐらい行って。びっくりした。おっきな川がある。飯場というのは名ばかりで。そこには飯炊きのおばちゃんがいる。南アルプス登山をする人たちがときたま通るぐらいで、誰も通らない。そこは将来ダムになる。明日からどうするかっていやあ、穴を試験掘り、50 メーターぐらい。だけど、機械がいまのように電気じゃなくて、ガスエンジンを使ったやつだった。で、ガスが〔穴の中に〕溜まって、倒れるんよ。意識がなくなっちゃう。2 人とも倒れちゃいけないということで〔交替で〕1 人ずつ入る。わたしも何回か倒れて、仲間に引きずりだされたんだけど。もちろん、こっちから行った人としか組まんけんね。他人（ひと）とは組みたくないけん。

1 ヶ月しないうちに、変な噂を聞いちゃった。「おい、ここでは働いてもあ

んまりカネがもらえんらしいよ」って。それでも別にどうってことなかった。甘いもんがすごく欲しくて。で、自分のうちに甘いもんを送れとかなんとかっていう手紙をときたま書いたんだけど。そんなときは〔手許に甘いものが〕なかったんで、「ちょっと井川村に降りて、甘いもんでも食おう」と。全員（ぜんぶ）でというわけにはいかんから、3名か4名〔で出かけて行った〕。それで3ヵ月ぐらい働いたのかな。カネはくれないっていうから、もうそんなときは、ダイナマイトなんかを〔勝手に〕使ってね。大きな川がすぐそばにあった。ヤマメがすごくおいしいけん。わたしがダイナマイト係。他の2、3人は、下で網を持って拾いかた。毎度、ボンボンボンボン、投げちゃう。もう、そういうの、平気だったね。結局は、おカネはもらえなかったの。〔わたしたちの後続の〕二軍も〔敬愛園から〕来たのよ。その人たちは下のほうで働いた、井川村の飯場で。

ひどい目にあった。そのときはまだ親父がいたのかな、敬愛園（ここ）に。「親父、もう帰るけん、カネを送れ」って。親父に少し送ってもらって。それで、1人だけね、病気が少し〔重くて〕手を悪くしたりして〔た人がいて〕。ほんと悲しかったんだけど、「おまえ、ごめんね。おまえを置いてくわけにいかんけども。でも、このままおってもおカネはもらえないから」って、そういうことで〔彼を置いて〕逃げてきた。大日峠（だいにちとうげ）というところがあって、そこまでテクテク歩いた。荷物もそんなあることはないし、土産もないし。そこまで歩いてきて〔バスに乗って〕。まあ、建設会社（むこう）の人たちは、わたしたちがいなくなるということをつぶん、感づいとったんじゃないかと思うけどね。追っかけてもこなかった。

帰ってきて、わたしは、それからスタンドに〔働きに〕行った。それはもう前段階の話。

第2回聞き取り（2008年8月）

離婚させられ心の病いをやんだ妹

じつはね、わたしのお袋は91歳なんです。10日ぐらい前にね、うちでね、お盆がくるから……。田舎はね、やっぱり、お盆とか大事にするんだよ。先祖を大事にする。91歳ですよ。ヨボヨボしとんですけど。まあ、なんとか、お墓掃除に行つて。〔そして〕あまりにも玄関の戸が汚れとったから、水をかけて洗つとったところが、滑っちゃってね。コンクリでしょ。腰を打って、動けないようになって。こんだ、〔わたしの〕妹が面倒をみるんだけど、その妹自体が、他人（ひと）から面倒みてもらわなければいけない状態なんで。それで、ちょうどお盆に入ればね、保健所のほう動かんし、介護のほうもなかなか〔依頼〕できないもんで、わたしのほうでなんとかしようと思ったら、妹がね……。

妹のことはこのあいだ話をしたよね。してないか。じゃ、妹のことから。〔妹はわたしより〕1つ〔下〕。いま、70歳になったのかな。22、3歳のころに山形〔出身〕のひとと遠距離恋愛をしちゃってね。お袋は——子供（きょうだい）5名いるんですよ、それで娘（いもうと）は1人なんで——どうしても女の子をそばに置きたいということで、反対したんですけども、きかんかった。わたしはそのとき敬愛園（こっち）へいたわけだけでも、親父から「じつはこうなんだけど、おまえはどう思うか？」っていうから、「本人が相手を好きになっ

と一緒にするんであれば、それはそれで妹が幸せになるんであればいいんじゃないか」っていうそういう話をして。〔婿さんは〕東京の会社に〔勤めてるひとで〕。それで〔妹は〕東京へ行って、結婚生活を始めた。〔婿の出身地の〕東北地方というところは、先生もご存知のように、この、ハンセンに関しては特別なものがあってね。たぶん、わたしがこういう療養所（とこ）にいてハンセン〔病〕だということがわかったんでしょ。そうは言わないけど、妹は。1年か1年半ぐらいで、離婚をさせられた。心を病んじゃった。それ以来、何十年入退院を〔繰り返している〕。若いときは、親父が屋久島の名士だったもんだから、役場に勤めるとか、郵便局、農協に勤めるとかできよったんだけど。年をとってくるにしたがって、その〔症状が出てくる〕期間がね、短くなった。わたし自身、できることは一生懸命、妹のためにしてやったんだけど、妹は入退院の繰り返し。ふつうなら、ちょっと、あ、自分でもおかしいなあと思えば、自分で病院に行くでしょ。行かないの、これが。完全におかしくなるまでは〔行かない〕。90歳のお袋が気をつかって、「薬は飲んだかな？」「何は飲んだか？」って、そういう話するんだけど、そうなりゃあね、もう〔夜も〕寝ない。

わたしは、講演なんかでときたま話をするんですよ、妹のことをね。「心を病んでしまいました」と。もう40数年間、それを繰り返してる。よくなったり悪くなったり。去年の12月、忘れもしない24日、クリスマスイブに屋久島へ帰って、〔病院に〕連れて行って。連れて行くときも、本人は足が立たんのですよ。鬱病っていうのは……。まあ、その病気に関してはわたしは〔専門的なことは〕わかりませんが。先生に聞いたんですよ、「先生、重い物を持つこともないのに、なんで腰を痛くする？」やっぱ、したくてもなにもできないものだから、じいっと座ってる。そのために腰をや〔られ〕るっていう〔のが鬱病にはありがちだというのが、医者の説明でした〕。それで、ご存知のように、そういうひとたちに「頑張れ」なんてことは禁句だと。そのへんはわたしも重々わかっていて。

〔一度入院すると〕だいたい4ヵ月か5ヵ月ぐらい病院にいるときにも、ずっと悪いわけじゃないですからね。いいときはすごくいい。〔妹は〕すごく頭が切れるために、法律書ぜんぶ読みあさって。この精神病に関する法律は変わりましたんでね、2、3年前に。それで、なにかあるときはすぐ保健所に電話したり、院長に噛みついてたりするんですよ。「〔法律のこと〕おまえがわかることはいいんだけど、でも、それがプラスになるってことはなかなかないよ。いまの世の中で、たとえば、院長を攻撃する。おまえに返ってくるものは、やはり……。院長が〔おまえのことは〕もう、ああだこうだ言わないほうがいいと、そういう形になっちゃえば、おまえ自身が損するよ」って。そこはね、なんでしょね、やっぱ、病気がさせるんですかね。

そういうことがあって、わたしは、一昨日の晩8時に屋久島に着きまして。それで、昨日の朝5時にうちを出て〔鹿屋に〕帰ってきて、お袋を近くの病院に入院させた。やっぱ、わたしの目の届くところでないね。鹿児島〔市〕にも1人弟がいるんだけどね、透析をしてるもんだから、どうしてもできない。それでまあ、わたしはクリスチャンだけど、わたしに神様が試練をくださってるのかなと、そう思ってる。そう思わなきゃどうしてもできない。

社会復帰への苦闘の体験

〔社会復帰の経験?〕昭和30年代だったかな。わたしは健康だったからね。自分でヒョコヒョコヒョコヒョコ出ていったり。もうおかまいなし。〔そうはいっても〕まだそのころはやっぱり……。大西園長って知ってるでしょ、大西基四夫（おおにし・きしお）。鹿児島では天文館という〔ところが〕繁華街。そこで大西園長が〔むこうから〕来よった。ばったり会った。わたしはこのような男だから、「あ、先生！ 珍しいですね」〔って、自分から声をかけた。しばらく〕会ってなかったもんだから。そうしたら、敬愛園（ここ）でね、〔毎月〕28日に例会をする。28日が〔開園〕記念日だから。そのときに、「岩川洋一郎君が無断で出とったはずだから、始末書を書かせろ」なんて言っておられたとかって。——〔そういうとき〕みんなはコソコソ逃げるんでしょけども、わたしは堂々とね、園長だろうが誰だろうがそんなことかまわんと思ってますからね。だから、「あ、先生、お元気でしたか？」って言った。そのときはなににもなかったんだけど、〔敬愛園に〕帰ってきてみて、その定例〔会〕のなかで、「あれに始末書を書かせろ」と。園がわたしに書かせるんじゃないくて、自治会（ここ）に保安部というのがあつ〔て、そこに書かせ〕たんです。そのころは〔入所者のあいだで〕喧嘩をしたり〔とか〕そういうのがたくさんあったですからね。〔まだ入所者の〕平均年齢が50ぐらいのときじゃないですか。

わたし、正式に〔社会復帰〕したことあるんですよ。当時は、社会復帰じゃなくて、なんて言ったのかなあ。軽快退所。その当時までは菌がでるひともいたのはいたんですよ。プロミンを打って、みなさんもう大部分は菌は出ないひとたちが多かったんですけども。それで、わたしも軽快退所で出ました。そのかわり、いまのような形では、鹿児島県からどうだ、厚生省（こうろうしょう）からどうだという支援策（こと）は、いっさいない。証明もなんにもない。わたしは〔軽快退所の証明書〕もらった覚えがない。わたしが出たのが21歳。その当時、車の時代が来るということで、みなさん免許を取りたかったのよ。免許を取る条件として、ここを出なければダメだということ。

鹿児島にお袋がいて、ちっちゃい弟（やつ）らを高校に出したりしよったもんだから、そこから〔教習場に〕通って、鹿児島で〔免許を〕取りました。——〔前回も〕その話、したかもしれんけど——鹿屋では取れない。それで、時代が少しずつ変わってきて、〔園外の〕近くの住所を借りて、みんな、こんどは車の免許を取りだした。何年かしたら、敬愛園（ここ）の住所でも、車の免許が取れるようになった。

免許を取るまでに、わたしもね、職を見つけるために〔なにか技術を身に付けなきゃダメだと〕。敬愛園（ここ）に写真部というのがあって。そこで自分で現像したりなにしたりね、写真の技術をいちおう身につけた。それで、外に出て、免許だけは取ろうと思っと思って、自動車学校に行きながら、仕事する。やっぱ、お袋が難儀（あれ）だから、少しでも〔家計を助けよう〕と思ってね、仕事〔を探〕した。〔しかし〕写真屋さんていっても、そんな適当なところないのよ。〔わたしは〕自動車学校に行ってるでしょう。いまのように、時間があるから〔集中的に〕自動車学校で練習するということ、ないから。何日かにいっぺん行って、〔決められた〕時間だけ乗って、ということ。それで、どうしようか、と思ったときにね、缶詰会社のね、トラックの助手の求人（あれ）が出とった。行ったら、「ああ、どうぞ、来てください。きょうからでもいい

です」。あの当時ね、日給 180 円だった。トラックの助手〔の仕事しながら〕いちおう免許を取って。うーん、東京に行こうかな、と思ったんだけど。屋久島（いなか）にね、おじいちゃんとおばあちゃん〔がいる〕。わたしの親父は、ほら、敬愛園（ここ）にいたからね。じゃあ、〔わたしも〕屋久島のおじいちゃん、おばあちゃんに、ちょっと孝行（あれ）しようかと思って、屋久島に帰ったんだ。

帰って3年ぐらいね、トラックに乗っちゃった。やっぱり若い、22、3 だったか、そのころは元気だったから、どんな仕事もできた。〔トラックで〕砂利運び。あのころね、道路整備が盛んなころだったんだ。もう、肉体労働、バンバンしてね。〔わたしは〕こういう人間だから、ひとには負けん気があるからね。まあ、その建設会社自体が従兄の会社だったんだね。〔それまでは〕じいちゃん、ばあちゃんがいて、農業の手伝いをしてたんですよ。田んぼがあったり、蜜柑畑があったりして。そしたら、その従兄の、社長が、わたしのことを知って、「おまえ、遊んどるなら、ちょっと加勢せんか」と。「じいちゃん、ばあちゃん、俺がいなくても大丈夫だよ」「うん、おまえがいなくてもいいから、まあ、仕事せんか」ということで、もう真っ黒になる〔ほど〕、朝昼晩働いた。いくら若くても、日中暑いところでの〔肉体労働〕。やっぱり、ちょっと疲れがきちゃった。病気が悪くなるということはないんだけど。——あのね、先生、このハンセンというのはね、これ以上すればおかしくなるんじゃないかというのはね、自分でわかるんですよ、長年の経験で。それで、わたしも、そういうことを何回かやって……。〔ほんとには〕悪くはならなかったけど。でもね、やはりね、おかしいことでね、40 年、50 年で、見てごらんさい、手（ここ）が自然にね、変わるんですよ。〔脱肉していく。〕なんか、そういう形でね、これ以上無理したらおかしくなるんじゃないかな、と思ってね。それで、3 年ぐらいたら〔敬愛園に〕帰ってきちゃった。

帰ってきて、それで病気になるというそういうあれじゃないからね。その当時になったら、所外労務というのが始まった。わたしは〔入所者仲間の〕山本というのと〔外へ仕事を探しに〕出て、その〔ガソリンスタンドの〕社長に会って、仕事に行くようにしたんだけど。

その当時〔社会にはハンセン病への〕偏見が、確かにあるとは思ってたんだけどね。わたしが辞めた後、従業員に「おい、おまえたちは、俺が敬愛園から来とることを知ると？」「知ってましたよ」「それで、どうもなかったか？」「それは、どうあるわけない」って。「どうあったら、わたしはすぐ辞めたよ」。みんな、そう言ってくれた。本心かどうか知らんけどね。だから、偏見とか差別は、たしかにあるのはあるけれども、でもまあ、社長自身がそういうひとだったから、あそこで 20 年間〔働けたんです〕。

わたし、さっき言ったように、少し〔無理を続けると〕からだが〔こたえる〕。セメントの上はね、ほんと、人間のからだに悪いんですよ。だから、自分でね、なんかおかしいなあ、というときはね、社長に言って、「社長、ちょっとね、具合悪くなるかもしれないから、少し休ませてよ」って。そういうことを言われたらね、〔社長は〕俠気（おとこぎ）があるから、「ヨッシャ」って。1 週間か 2 週間ぐらい休んで、釣りに行っちゃうんですよ。そういうことを繰り返して、20 年間勤めたんだけどね。

夫婦で付添作業をして4畳半部屋を確保／余儀なくされた堕胎

〔結婚したのは〕わたしが28歳のとき。家内は、わたしより5つ上なんですよ。結婚したが、その当時は4畳半〔の夫婦〕部屋なんてのはないからね。それで、付添い。40年前までは、職員の付添いなんていなかった。わたしたち〔入所者で病気が軽い者〕が付添いをする。その代わり、〔寮舎に付添用の〕4畳半の部屋があったから、みんな、結婚したりしたら、まずそこに行きよった。〔夫婦の部屋を確保する〕それが目的で〔付添いに〕行きよったンや。

4、5年前から、行二（ぎょうに）の方¹が〔あいついで〕定年退職される。〔ここ〕3年ぐらい、後補充はないから、〔定年で辞めても新しく〕職員になれるひとはいない〔という問題がある〕んだけど。そのひとたち、〔勤続〕37年ぐらいというのが、いちばん長いよ。そのころならば、中学校を卒業して、パッと職員になりよった。〔患者がやっていた作業を職員作業に切り替えていくので大量に雇用されたひとたちが、いま辞めていく。〕2年半後には、52名の定年退職者が〔でる〕。そのなかで18名が看護師さん。——看護師さんはね、後補充はたぶんあと2、3年はあると思う。いま、看護師は119名かな、敬愛園（うち）は。看護師定員が、117名が2名増員になった。増員になったのは、今年の12月に〔敬愛園に〕認知症病棟ができるんで。これは全国に先駆けてね。わたしは“認知症”と呼びたくないから、「さくら病棟」と命名した。

〔話を戻すと〕わたしは28歳で結婚したんだけどね、やはり、例のごとく、子どもができちゃって。それで〔堕胎を〕しなければいけなかった。これはね、自分の子孫がわたしで終わりということは、すごく打撃ではありましたね。わたしはね、11歳のとき敬愛園（ここ）に来て、そのままずっと〔ここに〕いたんじゃないくて、もう、一般社会で〔の〕あらゆることをわかっているからね。それで、講演のなかである偉い学者が、人生で何がいちばん大事かという、やっぱり自分の子孫を残すことだと言われた。そのことにわたしは、それはそうだと思いますね。〔ただ〕わたしは、親父の苦労を知っとンですよね。子どもが5名いて、いい形で出世コースに乗ってきたところをね、親父自身も、息子と同じ病気になった。——わたしは、親父は〔この〕病気じゃなかったんだ、ほんとに言って〔とと思ってますけどね〕。——親父の苦労（こと）を思って、やはり、自分の子どもはつukらないほうがいいかな、と。あの当時わたしの家内は〔健康だったから〕社会復帰が可能だった。どうもないんだから。いまでもどうもないンだけ。ただ少し、自律神経〔失調症〕じゃないかってなことね、まいってるけどね。いいときもあれば、悪いときもある。耳が鳴りだしたり。眩暈（めまい）がしたり。汗をだらだらかいたりね。そういうことで、まいってるんだけど。あんまり食欲もない。だから、わたしが、掃除、洗濯、食事の準備（あれ）からいっさい〔やってます〕。それはわたしは、べつに、どうってことない。若いときに、家内を苦しめました、いまその応報（あれ）がきとるんだぞって〔思ってる〕。

20年前に食料部長をしたのが自治会の仕事の最初

自治会の活動をしたのは、20年前にはじめて食料部長ちゅうのをね、ちょっと〔やった〕。「おまえも自治会に加勢せんか」と。もう〔50前後の〕いい

¹ 「行政職俸給表（二）」が適用される国家公務員のこと。

年でしたからね。わたしの兄貴分〔というか〕友達のようなひとが「おまえもやってくれんか」と言うんで、断りきれんで。わたしは、あんまりしたくなかったんです。縛られたくないってことで。まだ、ほかに行って、いい仕事をしたいなんていう気持ちがあったね。

ちょっと待てよ。〔ここの〕豚舎で勤めたことがある。それはまだ若いとき。ちょうど彼女と結婚したころだから、28歳のころ。〔新しいほうの〕火葬場のこっち側に、塵（ちり）を焼くところがあるんだけど、あすこに豚舎があつてね。むこう側には牛舎があつた。牛舎というのは、乳牛を1頭飼ってあってね、ミルクを搾って、それを病棟の炊事場に入れて、そのあがりでいくくらい〔の作業賃を〕ということで契約しよった。豚舎もね、7名ぐらいで契約してね、作業賃もらってね。豚舎で2年、3年ぐらい勤めました。その当時は、残飯が出るからね。120〜30〔頭、飼ってました。〕子豚（こども）を生産してましたからね。夜中に子ども産ましたり、そういう経験もありましたよ。〔この話は、静岡県のダム工事現場に出稼ぎに行く〕前です。

〔話を戻すと〕食料部長、1年間やりました。当時も〔炊事に〕27、8名の職員がいて。免許を取った調理師がいて。その上に室長がいて、係長がいるとかっていう、いまのような体系になってました。大きな釜で炊くから、麦ご飯だったけど、すごく美味しかった。でも、やっぱり、みんなね、自分で炊いたご飯を食べたいのよ。それで、わたしが食料部長になったときに、みんなの意見を聞いて、〔不自由者が入っている〕センターは別にして、一般舎にかんしては、お米を現物で〔配る〕という、それを始めた。それと、肉は嫌いだけど魚は好きだというひとがいるときには、AB食をつくった。Aは牛肉のすき焼きですよ。Bは魚の〔なになにですよ。好きなほうを選んでくださいと〕。その名残（のこり）が、いまでも半月に4回ぐらいAB食があるかな。

つぎには常任委員という話があったけど、「すみません、わたしはまた、田舎に帰らなきゃいかん」とお断りして。それで、さっき言ったように、あっち行ったりこっち行ったり。屋久島でトビウオ漁というのがあってね。トビウオは5月に飛ぶんですよ。藻が生えとるとこに、トビウオが卵を産みつけにくる。晚にくる。明け方、卵を産む。もう、おっきな湾が真っ白になるぐらい。ほれ、鮭の、雌の卵子に雄が〔精子を〕吹きかける、ああいう状態が続く。3年ぐらい〔トビウオ漁に〕わたしは行ってね、いいカネになりましたけどね。あの当時は、部落部落で〔トビウオ漁に出ましたね〕。——〔わたしは〕あらゆる仕事をしました。

藤原会長の思い出

それで、わたしが自治会〔活動を本格的に〕やったのは、〔平成〕10年〔から〕。川邊（かわなべ）〔哲哉〕さんが会長のとき。ちょうど〔ハンセン病の違憲国賠〕裁判が始まったころだな。〔判決が〕それから3年〔後の平成〕13年。〔裁判ということで大騒ぎだったか、だって？〕そんなにまではなかったですよ、敬愛園（うち）は。〔第1次原告の〕13名のうち、9名が敬愛園（うち）で、あとは恵楓園だった。〔そのとき〕わたしは常任〔委員〕……。

〔忘れてた。〕平成4年に1回だけ〔自治会役員を〕したことがあった。藤原〔頼高〕っていうのが、わたしの兄貴分で——〔退所者の〕森元美代治の、いわば兄貴分のようなひと。あれも喜界島〔出身〕。中央大学を出てね、すごく

頭のいいひとだった。〔そのころは〕川越〔優〕さんと川邊〔哲哉〕さんと藤原〔頼高〕さんと、交互に1年1年会長をやった。3名で話し合っ、今年はおまえが会長、その代わりわたしが副会長だとかあれだとかっていう形で、回しとった。それが10年ぐらい続いたのかな。藤原は平成4年の5月28日に亡くなったんだけど、敬愛園のゲートボールを強くしたのは彼なんです。〔その話は〕聞いたでしょ。だから、その話はもう言いません。

平成4年にね、藤原が「最後の自治会長をする」と言っ。その前に彼は噴門ガンになったために、志布志病院で手術した〔けど、余命〕あと1年という宣告を受けた。ご存知のように、胃ガンは、いまはだいたい、早期ならすぐ〔治る〕。でも、藤原（そいつ）は頭がよくて、従兄弟にも医者がいたんだけど、医者を馬鹿にして。お医者さんに受診（けんさ）したためしがない。自分で医学（いしゃ）の本を買ってきて、自分でどうすればいいこうすればいい、というような人だった。それで、血を吐いた。胃は、下のほうなら半分取っても大丈夫らしいんだけど、噴門ガン、気管に近いところにできたガンは、もうダメだっ。〔でも、余命〕1年というのをね、1年半にしちゃった。それで、じつは、その弟分のような人——自治会の副会長なんかもして、人望もあった人——が、医療ミスみたいな感じで亡くなってる。〔厳密にいえば〕医療ミスじゃないんだけど。そのひともしガンで亡くなった。それで〔藤原さんは〕「俺が生きてるあいだに、医療のことに関して、施設に対して、もう少しものを言わなければいけない」と、そういうことで会長を引き受けた。

2月でしょ、〔自治会役員の〕改選が。それで、「おまえも入れ」と。わたしはまだ屋久島に帰ったところで、〔新執行部が〕2月から始まって2ヵ月は〔わたしは自治会の〕仕事をしなくて、4月に〔敬愛園に戻って〕来て。で、〔藤原会長は〕5月の28日に死んだから、2ヵ月ぐらい、わたしは彼の下で仕事をしたのかな。でも、〔藤原会長が自治会室に出てきていたのは〕1ヵ月。あとはもう、病棟だった。わたしは朝の3時にかならず〔藤原さんの病室に見舞いに〕行って、帰ってきて少し寝て、それで〔自治会の〕仕事しよった。そのときの仕事が涉外。涉外っていうのは〔言うなれば〕外務大臣や。1年間という約束でしました。そのときは、〔各寮舎の〕プロパンをどうするとか何をどうするとかという話もありました。で、1年で辞めて、また屋久島に。

屋久島に帰ってポンカン作り

親父が平成6年に亡くなったから、屋久島に3年半ぐらいだったかな、帰って。ポンカンづくりをしました。苦労しました。まあ、こんなに苦労するンかなあと思いましたけどもね。でも、やっぱり、親父が残してくれたもの。蜜柑畑っていうのは、1年ほったら、もう〔ただの〕山になっちゃう。〔そうになったら〕どうしようもできない。だからね、言っちゃあなんだけど、消毒するのよ。年間12、3回。〔1回するのに〕2日間かかる。だいたい1町歩ぐらいあったから、剪定（せんてい）をすとか、摘花（てっか）をするときは、大変ですよ。すこし、やっぱり、無理したかなと思った……。

〔よそから〕屋久島に〔移って〕来るひとは、定年退職した人が来るんです。それで、自分勝手にやっ。部落の共同作業には全然出てこない。部落の会費（ぶひ）なんかも入れない。そういうことなんだけどもね。まあ、カネ持つとるからね。だから、わたしが蜜柑畑（そこ）を売るときにね、1千万ぐらいで

買いましょうという人がいたんだけど。ただ〔その人が自分一人の考えで〕無農薬にしまえばね、隣近所がぜんぶ、どうしようもできない。〔その人がよほどの〕手入れしなければ〔そこで発生した〕虫が、ほかのところにぜんぶうつっちゃう。仕方ないから、隣の人に、10年でなにがしでという契約で買ってもらったの。10年間、どうぞ〔蜜柑の栽培を〕してください。その代わり、10年したら土地代金（おかね）払ってくださいと。10年して、やっとおカネもらいましたけどね。

それでまあ、〔屋久島の〕うちにはお袋と、妹が〔入〕退院を繰り返す。お袋は、元気なんです。近くに2反ぐらいの畑があって、野菜つくったりして。〔わたしの〕イトコハトコに食わせるのが楽しみです。そういうお袋なんでね、わたしもなにかあったときは帰ってますけど。

裁判に「賛成か、静観か」

こんどは、平成10年になったときに、竹牟禮（たけむれ）さん、知ってるでしょ、竹牟禮巳良（みよし）。まあ、一方から言えば、固い。固いっていうより、頑固。頑固というのは、この〔ハンセン病違憲国賠〕裁判に関しては、もう絶対反対。たとえばね、わたしのオジ、玉城清吉というのが——沖縄に帰りましたけども——このひとも、この裁判に関しては頑固だった。民主党の菅〔直人〕さんが〔平成11年1月10日に〕来たの、敬愛園（こっち）へ。そのときに〔菅さんと入所者が〕一緒に〔園内の〕お風呂に入ることが伝わってきたもので、それでわたしが玉城清吉（うちのじいさん）と沖縄〔出身〕の岡〔忠〕さんと真宗同愛会（ほんさん）の森山〔重友〕さんというひとと——まあ〔いわゆる〕健康なひとやね——その3名を選んで、〔マスコミが〕写真を撮るということで〔準備〕しといたら、ちょっと堅山〔勲〕に出し抜かれて、あくる朝〔の新聞〕には、「菅さん、患者とお風呂に入った」ということで、堅山と〔菅さんの〕2人〔の写真〕が載ってた。堅山って、全原協（げんこくだん）の副会長だったけど、いまは事務局長。だから、1ヵ月にいっぺんぐらい東京に行ってるんじゃないですか。わたしの何倍も代議士なんかとは〔接触してるでしょう〕。

話を戻しましょう。竹牟禮（あのひと）は、わたしの兄貴分みたいな形で、すぐ気が合って。〔いま〕わたしは彼を『始良野』〔編集〕の係にしますんですけどね。——あれが、「おまえも年じゃけん、おまえがもし社会復帰をすることがなければ、ぼちぼち自治会をなんとかしてやらん、やっぱり、もうどうしようもでけんよ」と。その当時、女性のひとがいたんよ、〔自治会の〕執行委員で。そのひとは、なかなか頭はいいんだけど、いまは認知症（ちほう）になっちゃった、かわいそうに。そのひとがね、もう、やめたい、やめたいっていうのを、会長の川邊さんが引っ張って。わたしは〔園内の〕学校に出てるときに、川邊さんから勉強を教えられたことがあったからね。あのひとは、人間的にはすごく、柔らかくて、いいところがあるんだけどね、一方では悪いところもあるの。それはわかってたからね。だから、〔川邊さんから誘われたときに〕どうしようかな、と思ったけども、竹牟禮さんいわく、「なんとかして加勢をすれば。〔結局はそれが〕自分のためになる」と。なんとなく、じゃあ、ということで、やっちゃった。それからのことなんです。

えっと、〔平成〕10年に、敬愛園（ここ）でね、〔全療協の〕支部長会議がおこなわれた。〔議題は、らい予防法違憲国賠請求訴訟に〕「賛成か、静観か」。

敬愛園（うち）の中央委員会は「静観」。静観というのは、もうちょっと様子を見て〔それから判断しよう〕。全療協としても静観ということで話し合いが決まった。その支部長会議のとき、わたしは副会長だから、とりあえず走り回って、みんなの食事の準備をしたりなにをしたり、段取りしよった。〔あとで〕話を聞いたら、会議がすんだとき〔敬愛園の自治〕会長の川邊さんが、荒田〔重夫〕さんにね、下りていって握手したっていう。荒田さんは〔原告〕第1号でしょ。——ちょっと待て。いまは〔本名に戻って〕田中民市さん。まだ、裁判に対して賛成〔という結論〕ではない。当時、全療協もまだ静観だった。すごく大事なところで〔川邊さんがそういうことをやったから〕問題になっちゃった。それで、川邊さんは〔自治会長を〕辞めなければいけない状態になった。それで、わたしたちもパッと辞表を出した。

こんどは、自治会をどうするかということになって、みんなから「なんとかしてくれんか」ということで、竹牟禮さん、あのひとが会長を引き受けた。彼は〔それまで〕常任委員したことない。会長したことない。でも、彼は〔星塚敬愛園の〕50年史、『名もなき星たちよ』を編集（かんこう）したの。だから彼は、敬愛園のことに關しては、すごく知ってる。ただし、経験がない。それで、「俺が会長をするのであれば、おまえが副会長だよ」っていうことで、条件〔の提示〕があった。わたしも、もしここで、自治会が休会とか潰すようなことになれば、このいまの重大な時期に、これはほんとに大変、入所者が混乱しちゃう。裁判がどうだ〔ということでも園内の意見が割れてた〕。あのころ〔賠償金請求額が1人〕1億円だったけんね。一方では、沖縄に行ったじいさんじゃないけども、「いままで生きてこれたのは、この法律があったから生きてきたんだよ」って、そういうことを言うひと、いまでもいるの。竹牟禮さんも、まったくそれとおんなじような気持ちのひと。彼が言うのには、筋が通つとるところもあるんですよ。誰もこういう施設があるということもわからんで、検診とか強制収容とかなかれば、〔社会の中で〕そのままですとって、たぶんいま、命のあるひとは半分だったろうと。わたしもそう思う。まあ、国の施策が悪かったのは、わたしは悪かったと思ってんですよ。〔でも〕「そういう形の法律があったから、いま現在の自分があるんだよ」と。筋通ってるのよ、療養所（こ）のなかで暮らしてきた人〔の実感〕に〔とって〕は。だから、その、いま93の、わたしのオバの旦那——オバが亡くなったから沖縄に帰ったんだけど——、菅さんとお風呂に入ったときに、菅さんが「おじさん、よくいままで生きてこられたねえ」ちゅったときに、「先生、法があったから、わたしはいままで好きな焼酎を飲みながら、生きてきたんだよ」と。菅さんはボカンとしてたと。それでね、これはまた余分な話なんだけど、〔大島〕青松園の前の〔自治〕会長だった、全療協の会長もしとったひと、曾我野〔一美〕さん。曾我野さんとそのおじさんが、宗教関係ですごく親友だったのよ。そしたら、〔全国原告団協議会の代表になった〕曾我野さんが「おまえも原告団に入れ、入れ」ちゅうんで、それからいっさい付き合いをやめてしまってたね。そんなようなひとだった。

新執行部は「裁判に反対」

けっきょくね、竹牟禮さんが会長になって、わたしが副会長になって、〔新しい〕自治会〔執行部〕が成立した。いつものことだけでも、星塚〔敬愛園〕

というところは特殊なところでね。やるとなりやバーンとやるんだけど、反対となったらもう、どこまでも徹底的。とりあえず、裁判には自治会は反対というかたち。〔もはや〕静観でもなかった。それが2年ぐらい続いたのかな。わたしも、ほんとに、あんなに早く〔裁判が原告勝訴で結着するとは思わなかった〕。——まあ、〔いまとなれば〕講演のなかではよく、3年もかからんで裁判に勝利したのは、やはり、いままでの国の政策が違憲（こう）だったということが、国民の大部分のひとたちの理解が得られた〔からだ〕っていうことで、わたしは話をするんですけどもね。

この前、先月の26日に〔ハンセン病問題〕基本法を説明する会をもったんですよ。それで、〔福岡の〕小林〔洋二〕弁護士と〔大分の〕徳田〔靖之〕弁護士（せんせい）が来て。わたしも徳田先生とは親しいもんですからね、飲んだときに、徳田先生が「あのときは、ほんとに、あの狭いところで、汚い布団にわたしは寝たよな」って、そう言うんです。というのはね、〔先月〕26日に、昼の2時から4時までその説明会があって、そのまた晩に「窪田茂久さんを偲ぶ会」というのがあってね——裁判の途中で脳梗塞で倒れちゃって〔亡くなった人〕——。「偲ぶ会」には〔用事があるって〕わたしはちょっと行けなかったんだけど。そこに西日本の弁護士ね、10名ぐらい。はじめてだった、こんなに来たのは。そのときに、そういう話が出て。「あのときは自治会が〔裁判に反対で〕ほんとに辛かったよ」って。だって、〔園内〕放送はさせないでしょ。〔面会入宿泊所に〕宿泊はさせないでしょ。コピーもさせない。〔集会のための〕場所も貸せない。そこまで徹底しておった。

自治会としては、裁判が終わってからは、やっぱり、大変でしたね。会長を引き受けるひとがいらない。わたしはまだ、会長なんて、経験もなにもないし。20年前に食料部長をしたのと、平成4年に常任委員したのと〔それだけ〕。そのかんは敬愛園（ここ）にいないもんだから〔自治会のことも〕全然わからん。で、平成10年からこっち、もう10年ぐらいになりまして、もう1から10まである程度のことはわかりましたけど。その当時、自治会をどうするかということね、ほんとに〔大変だった〕。また竹牟禮さんが1年、2年したのかなあ。竹牟禮さんは、とりあえず自治会をいっかい立ち上げたらば、あとはまたなんとかなると〔考えたんでしょう〕。

でも、裁判がすんで、やはり、地域との交流というのは、星塚はすごくあるんですよ。熊本のように〔昭和29年に起きた〕龍田寮事件とかね、ああいうことは全然ないもの。〔熊本では〕あとでも〔平成15年に〕黒川温泉の〔宿泊拒否〕問題があったり。——でもね、先生、あの当時、南日本新聞が、鹿児島県の旅館とかホテル50軒に、「熊本の黒川温泉でこのようなことがあったけど、〔そういう場合〕おたくではどうされますか？」って調べた。30パーセントが「黒川温泉とおんなじようなかたちでお断りをする場合があります」と。〔そういうアンケート結果を新聞に〕掲載したんですよ。——〔でも〕去年だったっけ、「らい学会」があって、この何年かは日本の〔ハンセン病〕発生者はゼロだ、と。もし〔日本国内で〕発病するひと〔があっても、それ〕は外国系のひと〔だと。だから、日本国内でハンセン病がうつるという心配は、もうまったくないんですよ〕。

〔それから、これは〕先生、ご存知？ 星塚〔敬愛園〕のばあい、48パーセントの入所者（ひと）が偽名を使った。現在でも34パーセント〔の入所者が〕

使い続けてる。〔偽名の問題は、裁判の〕原告〔になった〕人たちがね、いちばん気にしとる。わたしはもう、最初から本名で通したけンね。そんなこと、子どもだったから、わかりっこないわけですけども。

これは、先生、知らんだろうと思う。星塚敬愛園の90パーセントぐらいの入所者（ひと）が、本籍を直してるよ、星塚（ここ）に。わたしも30年ぐらい前に、籍を直してる。なぜ籍を直さなきゃならないか。どうしても、やっぱり、自分たちの親きょうだいにね、たとえば結婚の話があると〔なったときに、身内が〕こういうところにい〔ることがわか〕れば、結婚をしてはもらえんだろうと。わたしの療友（ともだち）、40年来の親しい盟友がいるんだけど、きょうだいとの縁を切ったとかね、そういうのがいたるところにゴロゴロしておる。ただ、言わんばっかり。言うのは、わたしのような〔立場にある〕もんとか、原告のひとたちがどっかで講演するとか、というひとしか言わない。〔でも〕そういうのは、いくらでも、いまでもある。

〔話を自治会の会長のことに戻しますと〕わたし〔自身〕は、副会長を3期か4期かして。平成16年が、わたし、はじめて会長をした。だから、まだ、ピーピーや。

こんどは〔全療協の〕中央執行委員、いま、うち〔のブロックから〕は熊本の〔菊池恵楓園の〕工藤〔昌敏〕さんが非常勤で行っている。5月からはわたしが行かなければ〔いけないかな〕ということだったんだけど、〔全療協事務〕局長の神（こう）ちゃん²に「コウちゃん、どうするんや？」って言った。「いや、これは、各支部で決めるもんじゃない。本部で決めるから」って。「ヨシッ、わかった。それなら、俺は黙って、そのままにしておくけンね」って。〔けっきょく、ほかの人が〕行つとるんじゃないかな。

ハンセン病問題基本法制定要求の署名運動

去年〔2007年の夏に、徳田弁護士がハンセン病問題基本法制定要求の100万人署名³をやると、東京の豊島公会堂でぶち上げたあと〕どうするかと、わたし自身、考えた。ふつうの場合であれば、支援団体とかにお願いするんだけど、まず、わたしはね、行政に〔協力してもらおうと〕。鹿児島県健康増進課のハンセン担当のひとに、Mさんという女性職員（ひと）がいて。地味なひとなんだけど、すごく熱心なひとでね。まずこのひとに、わたしはお願いしてみようと思って。1ヵ月にいっぺんぐらい〔敬愛園に〕来ますからね。それで、「じつは、こういう基本法というのが……」。もう、彼女は知った。〔わたしは、まずMさんをお願いして、そして課長をお願いして、部長から、

² 岩川さんが敬愛の念を込めて「コウちゃん」と呼ぶのは、神美知宏（こう・みちひろ）当時全療協（全国ハンセン病療養所入所者協議会）事務局長のこと。その後、全療協会長の職責を精力的に担われていたが、2014年5月9日、群馬県草津町での第10回ハンセン病市民学会全国集会の前夜、草津の温泉旅館で倒れ、逝去された。享年80。——生前、岩川さんは神さんと「自分の生まれ故郷の屋久島に一度ぜひ遊びに来てくれ」と約束していたそうで、遺骨の一部を預かり、2014年6月24日には屋久島の海に散骨してきた、という。

³ 「ハンセン病問題基本法」の正式名称は「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」。2008年6月11日制定、2009年4月1日施行。この法律の制定を求める「100万人署名運動」が展開され、7ヵ月のあいだに全国で93万筆の署名が集まった。

こんどは知事という形で……」「いや、いいです。わたしが〔上にも〕話をします」。知事にも話をしてくれて。それで、鹿児島県の行政、〔出先も含めて〕48カ所あるところにぜんぶ回して、署名をもらって〔くれた〕。もちろん、鹿屋市にもそれを要請した。宮崎県にもお願いした。それが全国にバーンと広がった。——わたしが神（こう）ちゃんに「俺はこうこうこういうことをして、いま、行政がそれに力を入れてくれてる」って話をしたら、すごく喜んだ。〔そして〕神（こう）ちゃんのほうから〔全療協の〕各支部に話をした。最終的には、これが全国的に広がっていった。

「〔ハンセン病問題の全面解決を目指して〕共に歩く会〔鹿屋〕」の松下〔徳二〕さんもね、すごく助けてくれてね。鹿児島県は2万いくら〔の署名〕になった。一番は、草津。三ちゃん⁴のどこ。あそこには、全原協の親分〔弐雄二〕がいるけんね。——あすこは、町が小さいために、みんな一緒になって闘う。〔群馬県が〕たぶん10万〔筆〕とちょっとだった。

そのあとがあるンよ。こんどの法律は、〔国立のハンセン病療養所が〕いかに地域に施設を開放できるかっていうのが理念ですから。それを〔実現〕するためには、いまの国の状態、県の格差のある状態、市の格差のある状態のなかで、〔ハンセン病療養所のなかに新たな施設を〕併設するといったって、どこがするか。これはできっこない。ということで、わたしは、まずなんていっても、こんど法務大臣になった保岡〔興治〕（やすおか・おきはる）さんに、ぜひ、地域での国会議員〔懇談会〕の立ち上げをお願いします、と。そしたら、保岡さんがそれをオーケイということで、〔全療協の〕各支部長がいるなかで、地域の〔国会議員の〕懇談会を立ち上げることを、わたしは訴えた。それがもう全国にパァッと広がった。それで、鹿児島県が一番〔乗り〕だろうと思ったら、駿河〔療養所〕の小鹿〔美佐雄〕会長（さん）が「岩川さん、ありがとうね。わたしのところはもう立ち上げが決まりましたよ」って。まだうちは、大將が大臣になったために、保岡大臣（このひと）が会長で、森山〔裕（ひろし）〕代議士（さん）が事務局長という形でやろうかと思っ〔て準備を進めているところだ〕た。やはりね、先生ね、わたしは、この基本法〔の理念の実現〕に関しては、国会議員でないといけないだろうと。

たとえば、奄美〔和光園〕のように、〔地域の外来診療を引き受けるという〕あの形で、「どうぞ、みなさん、わたしのところに診療に来てください」と言っても、うちでは、これ、できっこない。うちは〔医者〕が11名いますけどもね、園長と副園長〔を含めて〕常勤は3、4名ぐらいかな。あとはみんな、1週間のうち2日ぐらい来て。うちに籍があって給料はこっちからもらうけれども、あとは鹿児島大学〔病院〕にいてという〔形〕。〔それでは、地域のみなさんに〕「どうぞ来てください」という形にはならない。

奄美〔和光園〕、いま〔入所者が〕54名っていったな。〔そこへ〕外来診療に来るのが年間7,000名から8,000名。俺はこの前〔和光園の自治〕会長に「だいたい、入所者はどう思っとなだ？ 年間に7,000名も8,000名も来て、あんななんかは不自由せんのか？」つったらね、黙っとったよ。

⁴ ここで岩川さんが親愛の情を込めて「サンちゃん」と呼んでいるのは、群馬県草津町にある国立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」で、長年にわたって自治会長をつとめている藤田三四郎さんのことである。

もちろん、国は、将来構想という形で〔ハンセン病療養所内の〕集約〔化〕を進めてる。〔国の方針は〕職員は減らす。予算を減らす。さきほど言ったように、あと2年半たって、〔平成〕22年になったときにはね、52名の定年退職が出て、そのなかの18名は看護師だけでも、そのほかは専門職。たとえば、電気屋さんとかボイラー屋さんとか、運転手さん、車庫〔の係〕、給食〔の係〕。その専門職の後補充はいっさいない。たしかに、亡くなるから、入所者（ひと）は減っていきます。だいたい年に20名は亡くなる。でも、ハンセン病の専門家がですね、一般の同じような介護度をもつ人と〔比べて、介護に要する時間は〕約2.5倍の時間がかかると。入所者（ひと）が減った、じゃあそれだけの〔人員の〕削減をするっていえば、国〔の姿勢〕はいままでとそんなに変わらない。厚労省に対してね、いくら、行二（ぎょうに）の後補充をしてくださいと言っても、しない。「公務員法でこう決まってるから、できません」「閣議決定で決まったから、行二の後補充はできません」と言うばかり。

〔わたしの考えでは〕職員を減らさないのがいちばんだから、これは国に対して、やっぱり、要求する。それにはやはり、国会議員を使ってするしかない。いくら全療協が頑張ってみても、神（こう）ちゃんが飛び回ってみても、これはダメ。国会議員を使うしかない。神（こう）ちゃんもその話に乗った。この基本法に関しては、各支部〔ごとに〕、まず地元国会議員〔の懇談会〕を立ち上げて、国会議員と話をしながら、自分たちの将来を考えると。これが基本です。わたしは、そう思ってる。〔全療協の〕各支部、〔そして〕全医労がどう動こうと、厚労省は——新しい基本法がこう決まったけども——わたしはサジ加減でしか動けないと思う。

この法律は、いままでの法律からすれば、10条まではすごくいいです。わかりやすい。11条と12条⁵のなかに、地域のみなさんの受入れをどうするかということをはじめて謳ってるんです。県、市、地域の、そういう公共団体は、国と協力しながら、ハンセン病療養所をいい方向に向かわなければいけないと。もうひとつは、一般社会のひとたちを入れて、治療できると。この法律で、〔わたしたちハンセン病回復者が〕一般のひとたちと一緒に暮らせると〔それが可能になった〕。——星塚敬愛園では、わたしがいつも言ってるのは、お袋とかきょうだいとは一緒に暮らせたらいいな、っていうこと。

ただ、ここになにか併設するということであれば、これは国がしないかぎり、わたしはゼッタイできないと思う。先生ね、あすこに〔園附属の〕看護学校の跡地があるでしょ。あすこを貸してくださいとかいうのは、もうすでにある。それは、精神障害者の社会復帰のための施設（あれ）を併設（あれ）したいんだが、ということで、すごくいいことなんでね、わたしは前向きに考えたいと思ってるけども。あるいは、あすこの広場を地域の公園のために貸してくれとかっていうのはある。——それを受け入れることは、地域のためには、それはいいんでしょうけども。まず、わたしたち〔ハンセン病回復者〕を中心に、わたしは動こうと思っている。国が言ってるのは、地域のひとたちとの交流はもち

⁵ 第12条は、以下のとおり。「国は、入所者の生活環境が地域社会から孤立することのないようにする等入所者の良好な生活環境の確保を図るため、国立ハンセン病療養所の土地、建物、設備等を地方公共団体又は地域住民等の利用に供する等必要な措置を講ずることができる。」

ろんできます、啓発活動もできます、と。〔それはもう、すでに取り組んでいる。しかし〕それ以上に、一緒に生活するというのであれば、国がなにかしなければ、これはできません。じゃあ、ここに〔知的障害者のための〕グループホームでもつくって、どうしますか？そこに敬愛園（うち）の職員が入って、そこで仕事ができたら、また国はそのための職員を補充することができるでしょうけども。それがないかぎり、地域のひとたちのために、その場所を貸すっていいかもしれないけども、ただそれだけでわたしたちが、あとの老後を、ほんとうに、ああ、よかったなと思って、生涯をすごせるかちゅったら、それはできないでしょ。

あんまり、いいことばかりで通しては、これはダメです。わたしは、まず、自分たちを中央に置きたいんです。そして、啓発活動ができ、交流ができ、そして、わたしたちが安心して生活できて〔ということが、現実目標〕。だいたい終（つい）の棲家と、みんな思ってるからね、〔いま敬愛園にいる入所者〕258名のひとたちは。わたしは、できたら社会復帰もしたいと思ってんだけど、この年になったらダメかなと思ってる。やっぱり、家内のことを思えばね。

将来構想というのは、わたしたちが〔これから〕安心して生活できるということなんですよ。あしたからどうするか。何が要るか。医療の問題です。介護、看護の問題。まずこれを確立しなければ、将来はないですね。お医者さんをどうする、看護師さんをどうする、介護員さんをどうする、そっから手をつけなければ、わたしたちの将来構想はないですよ。たとえば、併設をする、共同生活をする〔と言うが〕、地域のひとたちがここに何かを建てますから、場所さえ貸してくれたら、そこで一緒にわたしたちも生活をしましょうかという人たちが、先生、来るでしょうか。国は、そこまではしてくれません。みんな、少し〔考えが〕甘いんじゃないかと思ってんですけどね。

わたしが思ってるのは、将来構想よりは、わたしたちの自治会の将来をどうするかっていうことが一番大事。自治会がなければ、どうしようもない。将来構想どころの騒ぎじゃない。わたしの〔自治会長の〕任期は、来年の2月まで。そのあとは、どうなるかわからん。自治会がなくなれば、将来構想はありません。

いまの星塚の入所者が思ってることは、将来構想もですが、自治会の心配をみんなしてますよ。自治会がなければ、どうしようもできないっていうこと。まあ、先生も感じてられているかもしれないけど、全国でやっぱり、まず敬愛園が、わたしは飛び抜けてね、居住棟の広さとかそれにかんする整備の問題とかというのは、もう一番だと思う。ほかのところに負けないような、そういう形で〔やってきた〕。やっぱり、自治会が施設に対してそれだけの発言力（もの）を持ってるっていうこと〔が大事〕。国にやってもらってる〔んだけど〕、やっぱり、自治会があるとことないのではすごく違うということは、みんな知ってるわけですよ。だから、自治会がどうなるかっていうことが、みなさんの一番の関心事だと思うんです。

夏休み親子療養所訪問などの交流の取り組み

2週間ぐらい前だったかな、〔鹿児島県の〕夏休み親子療養所訪問〔が来ました〕。——きょうも宮崎県から来るんですけどもね。——これは県の事業でやってるの。もう7年目になります。去年はね、鹿児島県で280名ぐらい来た。

対応は大変。いっぺんにバスで来る。今年は 140 名ぐらい [でした]。みなさんの希望 (おねがい) はね，居宅で [入所者の] 話を聞きたいんだと。どんな生活をしてるのか見たいと。でね，例年に比べて，ちょっとね，[参加する] 子どもの年齢 (あれ) がちっちゃくなってるの。[なかには] 乳飲み子を連れてきたりね。鹿児島県は，この前，高校生が 1 人だった。[あとは] みんな，中学校，小学校。

それで，こんどね，10 月の何日だっけ。鹿児島県健康増進課の事業でね，県庁舎訪問というのがある。むこうでバスを仕立てて来て，[参加者は総勢で] たぶん 80 名ぐらいになるかなあ。うちは，いま，鹿児島県人が 150~60 人かな。[全体では] 258 名の入所者がいます。そのなかから，どなたでもいいんです。鹿児島県 [出身] の人じゃなくても。去年が 35，6 名，入所者が。それに職員の介護の人たちが付いていくので，50 [人ぐらいになる]。それと，[全療協は全国に] 13 支部ありますから，鹿児島県 [出身] の人たちがそこにいたら，そのひとたちも行けます。[鹿児島県が] 旅費を出してね。こんどは，霧島温泉に 1 泊して，明るく日は水族館を見るか，いま [NHK の大河ドラマで] 「篤姫」をやってるから，篤姫 [の展示会] を見るか，2 つのうちどっちかを見て。そして，一昨年からね，知事が会ってくれる。[それまでも] 知事が会うのは会うんだけど，5 分か 10 分ぐらいしかなかった。このごろは 40 分ぐらい会ってね，最後には記念撮影までするようになった。そのときに，わたしが [自治会長として] お礼を言う。ああいう場所で要求事は御法度だから。御法度いうよりは，やっぱり，感謝の気持ちがないといけないからね，人間はね。だからまあ，沖縄 [愛楽園] から来るし，大島 [青松園] から来るし，去年は多磨 [全生園] から来た。[退所者の] 森元美代治も夫婦で来た。彼は喜界島だものね，出身は。

Yaku Island is My First Home and Keiaien is My Final Home: Interview at Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's Disease Facility

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a man in his 70s who is living in Hoshizuka-Keiaien, a national Hansen's disease facility.

Mr. Yoichiro Iwakawa was born in Yaku Island, Kagoshima Prefecture in 1937. He was brought to Hoshizuka-Keiaien at Kanoya City in Kagoshima Prefecture by his father on May 23, 1948.

The first interview was practiced on December 26, 2007 at the head's office of the Hoshizuka-Keiaien residents' association. Mr. Iwakawa was 70 years old when the interview was practiced. Interviewers are Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, and Nao Shimonishi. The follow-up interview was added on August 17, 2008 at the same place with same interviewers as the first one.

Currently Mr. Iwakawa is serving as the head of the residents' association of Hoshizuka-Keiaien. It seems he believes that Hansen's disease facilities were helpful for the survival of Hansen's disease patients. Mr. Iwakawa says that he did not feel any loneliness when he was sent to the facility at the age of eleven. He had to transfer the school when his father moved his work place from Yakushima Town Hall to Kagoshima Prefecture Office. He did not have any friends in the new school but met many young patients of his age in the facility to enjoy playing baseball. Thanks to this circumstance, he was able to grow up without loneliness. A few years later his father also entered Hoshizuka-Keiaien (Mr. Iwakawa considers that his father would have received a misdiagnosis) but was released later with the good condition after the Promin treatment. Although everyone in Yakushima knew about the father's Hansen's disease history, it did not disturb his father's 12 years carrier and leadership as a town councilor. His father was a role model of Mr. Iwakawa. His father taught him that he did not need to feel inferior complex for Hansen's disease.

Although the effectiveness of the Segregation Policy was weakened, many Hansen's disease ex-patients had to stay in the facility due to the so-called, 'invisible bondage.' However, Mr. Iwakawa left the facility to get his driver's license. He enjoyed his youthful life at his hometown Yakushima as a truck driver. The only concern was the possibility of the recurrence of Hansen's disease for working hard. He had voluntarily returned to Hoshizuka-Keiaien whenever his health condition became worse even if he did not have recurrence symptoms of Hansen's disease. He said, "I have diverse work experiences." He joined in construction work of Ikawa Dam in Shizuoka Prefecture with his colleagues but, sadly, did not earn any salary. He also commuted from Hoshizuka-Keiaien to a gas station run by the owner who understood Hansen's disease well. Mr. Iwakawa occasionally returned to his hometown. He joined in fishing of flying fish on the sea of Yakushima. He also worked as a farmer to grow oranges for 3 years after his father died. He took care of his old mother and also helped his younger sister who divorced for the discrimination for the family members of Hansen's disease. Despite of these experiences, Mr. Iwakawa who became old now says, 'returning to society is difficult for me' and 'my final home is Hoshizuka-Keiaien.' It seems that the facility was a sort of haven for him when he encountered rough waves of society.

However, he also says that there were some problems with the Segregation Policy. His father was forced to resign from his work

position when he entered the facility, and his sister suffered from mental illness after the divorce for the family history of Hansen's disease. He got married to a woman whom he met in the facility but they were forced to have an abortion when his wife was pregnant. He was the one of the victims of the cruelty of the Segregation Policy.

Currently the number of the residents in the Hansen's disease facility is obviously decreasing due to the members' death for age. It means that the fate of the residents' association is not that bright. Mr. Iwakawa, as the head of the association, is struggling to find another future of Hoshizuka-Keiaien.

Keywords: Hansen's disease, Segregation Policy, life story